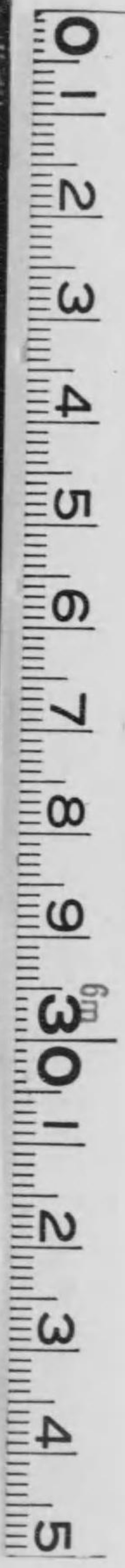


60
143



始



60

443

甲種
看護
教程

下卷

60-443

日本赤十字社編纂

甲種
看護教程

大正七年刊行

三版

下卷

大正

7. 7. 25

内文

甲種看護教程下卷

目次

第六編 看護

第一章 一般ノ看護

- 第一 患者ノ看侍
- 第二 病室ノ位置大小及區別
- 第三 病室ノ清潔
- 第四 病室ノ換氣
- 第五 病室ノ溫度
- 第六 病室ノ明暗
- 第七 寢臺ノ位置及整頓

一〇九六四四一一

目次

第八	患者ノ臥位	一二
第九	患者ノ清潔	一三
第十	患者ノ更衣	一五
第十一	患者ノ換褥	一五
第十二	患者ノ溫保	一八
第十三	患者ノ飲食	一八
第二章 各病症ニ應スル看護		
第一	褥瘡	二二
第二	睡眠	二三
第三	皮膚及發汗	二五
第四	呼吸	二九
第五	咳嗽及咯痰	三〇
		三二

第六	心動及脈搏	三三
第七	體溫	三五
第八	口腔及咽頭	三九
第九	流涎	四〇
第十	嘔吐	四一
第十一	便通	四三
第十二	放尿	四五
第三章	傳染病者ノ看護	四六
第四章	精神病者ノ看護	四九
第五章	褥婦ノ看護	五〇
第六章	哺乳兒ノ看護	五八

第七章	瀕死者ノ看護	六二
第八章	死後ノ處置	六四
第七編	治療ノ介輔	六六
第一章	與藥	六六
第二章	吸入	七〇
第三章	點入	七二
第一	點眼	七三
第二	點耳	七四
第四章	注射(注入)	七五
第一	尿道注射	七六
第二	皮下注射	七七

第三	食鹽水注射	七八
第五章	尿道「カテーテル」送入	七九
第六章	膀胱洗滌	八五
第七章	灌腸及注腸	八七
第八章	食道「カテーテル」送入	九〇
第九章	胃洗滌	九二
第十章	胃液採取	九三
第十一章	塗擦	九四
第十二章	塗布	九七
第十三章	含漱	九八

第十四章	撒布	九九
第十五章	芥子泥	一〇〇
第十六章	發泡膏	一〇二
第十七章	冷罨法	一〇三
第十八章	濕罨法	一〇五
第十九章	溫罨法	一〇六
第二十章	吸角及鬱血療法	一〇八
第二十一章	水蛭	一〇九
第二十二章	浴	一一一
第一	水浴	一一一

第二	蒸汽浴熱氣浴及發汗	一一六
第三	砂浴	一一九
第二十三章	醫療電氣	一二九
第二十四章	婦人病治療ノ特別介輔	一二四
第一	腔洗滌	一二四
第二	腔填塞	一二五
第三	子宮鏡用法	一二七
第八編	手術ノ介輔	一二九
第一章	手術ノ準備	一二九
第一	手術室	一二九
第二	器械綑帶材料及其他ノ諸具	一三〇

第三 患者ノ手術部看護者ノ手臂

其一 患者ノ手術部

其二 看護者ノ手臂

第二章 手術中ノ介輔

第三章 麻醉ノ介輔

第一 全身麻醉

第二 局所麻醉

第四章 手術前後ノ看護

第九編 消毒

第一章 消毒ノ方法

第一 燒却

一三四

一三五

一三九

一四〇

一四二

一四二

一五〇

一五二

一五五

一五五

一五五

第二 蒸汽消毒

第三 煮沸消毒

第四 藥物消毒

第二章 消毒法ノ應用

第一 病室

第二 寢臺椅子机類

第三 被服寢具窓掛類

第四 革製品

第五 飲食器

第六 廉價ナル物

第七 傳染病者及其ノ死體ノ運搬具

第八 患者ノ排泄物

一五六

一五七

一五七

一六四

一六四

一六六

一六六

一六七

一六七

一六八

一六八

一六八

第九	痰壺便器及尿器	一六九
第十	便所	一六九
第十一	糞壺及尿池	一七〇
第十二	浴槽	一七〇
第十三	污水	一七一
第十四	傳染病屍及納棺	一七一
第十五	傳染病者及其ノ看護者	一七二
第十六	手術部外科器械繃帶材料類	一七二
第十編 按摩		
第一章	按摩ノ本義及効用	一七四
第二章	按摩ニ必要ナル解剖上ノ智識	一七五

第三章 手技		
第一	按摩者ノ手	一八四
第二	患者ノ皮膚	一八四
第三	患者ノ體位	一八五
第四	其ノ他ノ注意事項	一八六
第四章 手技ノ種類		
第一	撫方	一八七
第二	揉方	一八七
第三	摩方	一九〇
第四	叩方	一九三
第五章 手技ノ組合		
		一九六

第六章	自力及他力ノ運動	一九七
第十一編	傳染病及其ノ他ノ疾病	一九九
第一章	傳染病ノ本體及病芽	一九九
第二章	傳染病發生ノ種類及徵候	二〇二
第三章	傳染病ノ豫防及消毒	二〇四
第四章	主ナル傳染病	二〇五
第一	虎列刺	二〇五
第二	「ベスト」	二〇八
第三	腸窒扶私	二一一
第四	「バラチフス」	二一四
第五	赤痢	二一四

第六	痘瘡麻疹及猩紅熱	二一五
第七	實扶的里	二一八
第八	發疹窒扶私	二一九
第九	流行性腦脊髓膜炎	二二〇
第十	肺結核	二二一
第十一	麻刺利亞	二二三
第十二	肺炎	二三四
第十三	流行性感胃	二三五
第五章	一般ニ多キ其ノ他ノ疾病	二二六
第一	脚氣	二二六
第二	花柳病	二二七
第三	眼炎	二二九

第四	耳中異物	二三〇
第五	齒痛	二三一
第六	衄血	二三二
第七	扁桃腺炎	二三二
第八	鼻感冒	二三三
第九	吐血	二三三
第十	下痢胃瘧及疝痛	二三四
第十一	腸寄生蟲	二三五
第十二	癩麻質斯	二三六
第十三	胸膜炎	二三七
第十四	癩痢	二三七
第十五	身體表面ノ炎症	二三八

第十六	癩	二三九
第十七	癰	二三九
第十八	癩疽	二四〇
第十九	鶏眼	二四〇
第二十	足臭	二四一
第二十一	足腫	二四一
第二十二	疥癬	二四二
第二十三	「ヘルニア」	二四三
第六章 小兒病		
第一	小兒急癩	二四四
第二	小兒吐瀉病	二四六
第三	百日咳	二四九

第四 腺病

第十二編 醫療器械

第一章 普通器械

第一	診斷器械	二五四
第二	小手術器械	二五七
第三	洗滌器械	二六二
第四	止血器械	二六四
第五	縫合器械	二六五
第六	鉤及鉗子	二六八
第七	注射及鬱血療法用吸吮器械	二六九
第八	截斷及截除術器械	二七三
第九	瀉血器械	二七六

第十 種痘器械

第十一 燒灼器械

第十二 麻醉器械

第十三 電氣器械

第十四 レンチエン放線器械

第十五 高周波透熱機(チアテルミー)

第十六 「ラヂウム」

第二章 各部器械

第一	穿顱術器械	二九二
第二	耳ノ器械	二九三
第三	鼻ノ器械	二九四
第四	眼ノ器械	二九六
		二九八

第五	口腔及咽頭ノ器械	二九九
第六	喉頭及氣管ノ器械	三〇二
第七	食道及胃腸ノ器械	三〇四
第八	胸腹ノ器械	三〇六
第九	肛門及直腸ノ器械	三〇六
第十	尿道及膀胱ノ器械	三〇八
第十一	婦人科器械	三一
第十二	産科器械	三一四
第三章 器械保全法		
第一	清拭法	三一七
第二	油拭法	三一八
第三	光澤磨法	三一九

第十三編 外傷		三二〇
第一章 創ノ本義及徵候		三二〇
第二章 創ノ種類		三二二
第一	切創	三二二
第二	刺創	三二二
第三	挫創	三二三
第四	裂創	三二三
第五	咬創	三二四
第六	銃創	三二四
第七	砲創	三二六
第三章 創ノ經過		三二七

第一	創ノ治療	三二七
第二	創ノ治療障礙	三二八
其一	創傷傳染病ノ本體	三二八
其二	創傷傳染病ノ種類	三三〇
其三	創傷傳染病ノ豫防	三三二
第四章	救急繃帶	三三六
第五章	出血	三三七
第一	出血ノ種類及徵候	三三七
第二	出血ノ處置	三三九
第三	止血法	三四一
其一	指壓ニ依ル止血法	三四一
其二	彈力性帶ニ依ル止血法	三四五

其三	創内ニテノ止血法	三四五
第六章	毒創	三四六
第七章	骨折	三四七
第一	骨折ノ本義及種類	三四七
第二	骨折ノ徵候	三四九
第三	骨折ノ治療	三五〇
第四	骨折ノ處置	三五〇
其一	骨折端ノ整復	三五二
其二	骨折繃帶	三五二
其三	骨折患者ノ運搬及位置	三五四
其四	箇箇ノ骨折ニ對スル注意	三五五
第八章	脱臼	三五七

第一	脱臼ノ本義及種類	三五七
第二	脱臼ノ徵候	三五八
第三	脱臼ノ處置	三五九

第九章	關節捻挫	三六〇
-----	------	-----

第十章	挫傷	三六〇
-----	----	-----

第十一章	擦傷	三六一
------	----	-----

第一	靴傷	三六二
----	----	-----

第二	鞍傷	三六二
----	----	-----

第十二章	火傷	三六三
------	----	-----

第一	火傷ノ徵候	三六三
----	-------	-----

第二	火傷ノ處置	三六四
----	-------	-----

第十三章	凍傷及凍瘡	三六七
------	-------	-----

第一	凍傷及凍瘡ノ徵候	三六七
----	----------	-----

第二	凍傷及凍瘡ノ處置	三六八
----	----------	-----

第十四編	救急	三七一
------	----	-----

第一章	墜落及頭ノ打撲ニ依ル人事不省	三七一
-----	----------------	-----

第二章	卒倒	三七二
-----	----	-----

第三章	中毒	三七三
-----	----	-----

第一	腐蝕毒	三七四
----	-----	-----

第二	麻醉毒	三七六
----	-----	-----

第四章	醉	三七八
-----	---	-----

第五章	異物哽塞	三七八
-----	------	-----

第六章	喝病	三七九
第七章	假死	三八一
第一	電擊假死	三八三
第二	毒氣吸入假死	三八四
第三	縊首假死	三八八
第四	溺水假死	三八九
第五	埋沒假死	三九二
第六	凍死假死	三九五
第八章	人工呼吸法	四〇二
第十五編	衛生	四〇二
第一章	土地及家屋	四〇二

第二章	飲食	四〇五
第三章	被服	四一〇
第四章	身體	四一二
第五章	運動及散步	四一四
第十六編	藥物及調劑	四一六
第一章	藥局方	四一六
第二章	藥物ノ種類	四一六
第三章	藥物ノ貯藏及容器	四一七
第四章	度量衡	四二一
第五章	溶液ノ濃度	四二六

第六章 調劑及配合禁忌

四二八

第七章 投藥ノ種類

四三〇

第一 水劑

四三一

第二 振盪合劑

四三二

第三 飽和劑

四三二

第四 乳劑

四三三

第五 浸劑及煎劑

四三四

第六 散劑及撒布劑

四三五

第七 丸劑

四三六

第八 錠劑

四三六

第九 硬膏劑

四三七

第十 軟膏劑

四三七

第十一 皮下注射劑

四三八

第十二 灌腸劑

四三八

第十三 坐藥

四三九

第八章 毒藥及劇藥ノ極量

四四〇

第九章 藥局用器械

四四一

第十章 主要藥物ノ性狀

四四七

藥物附表

四五七

第十七編 患者ノ運搬

四八〇

第一章 教練

四八〇

第一 各個教練

四八〇

第二 隊伍教練

四九〇

第二章 擔架

- 第一 擔架ノ構造
- 第二 擔伍ノ編成
- 第三 擔架ノ取扱
- 第四 擔伍ノ運動

五〇二

五〇三

五〇四

五〇九

五一九

第三章 徒手運搬

五二六

- 第一 一人ニテスル運搬
- 第二 二人ニテスル運搬

五二六

五二八

- 其一 坐位ニテスル運搬

五二八

- 其二 臥位ニテスル運搬

五三〇

第四章 擔架運搬

五三三

- 第一 擔架ニ載スルコト

五三四

- 其一 四人ニテ擔架ニ載スルコト

五三四

- 其二 三人ニテ擔架ニ載スルコト

五三六

- 其三 二人ニテ擔架ニ載スルコト

五三六

- 第二 擔架ノ上ノ位置

五三七

- 第三 行進及交代

五三八

- 其一 行進

五三九

- 其二 交代

五四〇

- 第四 障礙物ヲ越スコト

五四三

- 第五 急造擔架

五四七

第五章 車輛運搬

五四九

第六章 陸海軍ニ於テ使用ノ擔架

五五〇

第一 陸軍

五五一

第二 海軍

五五三

甲看護教程 下卷 終

甲看護教程 下卷

日本赤十字社編纂

第六編 看護

第一章 一般ノ看護

第一 患者ノ看侍

患者ノ看侍(番、見張)ハ重要ナル勤務ナリ若之ヲ等閑ニスルト
キハ患者ニ大害ヲ來スモノナリ例之ハ大發汗後ニ、又ハ夜中ニ
感冒セシメ兩便排泄ノ始末ヲ怠リ藥劑ノ用法ヲ誤リ熱アル患者
及精神病者ノ舉動、後出血等ヲ空シク看過スルトキハ爲ニ病況

一般ノ看護

ノ變易ヲ致シ甚シキハ患者ヲシテ死ニ陷ラシムルコトアリ
患者ノ看侍ハ日中ト夜中トニ分ツ看侍ニツキ特別ノ注意ヲ要ス
ルコトアルトキハ醫員ヨリ特ニ之ヲ命ス

看侍ニ當リタル者ハ其ノ時限内ニハ擔當ノ場所ヲ去ルヘカラス
又交代スルトキハ看護上須要ナル事項ヲ遺漏ナク交代者ニ申繼
クヘシ

日中ノ看侍ニ從事スル者ハ患者ノ床側適宜ノ處ニ居ルヘシ若一
人ニテ數患者ヲ看護スルトキハ病狀ノ輕重ヲ考ヘ或ハ甲患者或
ハ乙患者ノ側ニ侍シテ臥位ニ注意シ藥劑飲食物ヲ與ヘ罨法等ヲ
施シ兩便嘔吐發汗咳嗽等ヲ介輔シ(第七編治療ノ介輔參照)又繃

帶ノ正シキ位置ニ在ル様ニ心掛クヘシ

看侍中患者ニ急變アルトキハ醫員ニ報スヘシ但シ之ヲ報スルニ
ハ他ノ看護者若ハ已ムヲ得サレハ他ノ輕症患者ニ依リテ之ヲ爲
サシメ看侍者ハ須臾モ其ノ場所ヲ離ルヘカラス

夜中ノ看侍ハ之ヲ宵番ヨイバン及曉番アトバンニ分ツヲ例トス宵番ノ看侍者ハ日
中ノ看侍者ト交代シ曉番ノ者ハ交代時ニ至ルマテハ指定セラレ
タル場所ニ於テ休息スヘシ夜中ノ看侍者ハ日中看侍者ヨリモ動
作ヲ靜ニシ燈及爐ニ注意シ決シテ眠ルコトナク患者ノ側ニ居ル
ヘシ時時靜ニ室内ヲ歩ムコトヲ得

數多ノ患者ヲ看護スルトキハ觀察シタルコトヲ一一記憶シ難キ

モノナレハ睡眠兩便發汗惡寒戰慄脈搏呼吸體溫等ノ狀況ヲ看護
日誌ニ記シ醫員ノ閱覽ニ供スヘシ

第二 病室ノ位置大小及區別

病室ハ南ニ窓アリテ廣ク明ルク靜カナルヲ可トス病室内ニハ其ノ
大小ニ應シテ寢臺ヲ配置シ寢臺一個(患者一人)ニ要スル容積ハ三十
七立方米以上トス
傳染病室及精神病室ハ別棟トナシ一般ノ病室モ成ルヘク病類ニ從
ヒテ分ツモノトス

第三 病室ノ清潔

病室ハ極メテ清潔ニスルヲ要ス掃除ニ塵ヲ立ツヘカラス歩床ハ
毎日定時ニ輕ク水ヲ撒キテ拭ヒ或ハ濡雜巾ニテ拭ヒ要スレハ消

毒液ヲ撒キ雜巾ニテ拭フヘシ殊ニ机及寢臺ノ下室ノ隅爐ノ附近
ノ如キ汚塵ノ滯積シ易キ處ニ注意スヘシ其ノ他寢臺窓戶錠及室
内ノ諸器具ハ歩床ヲ拭ヒタル後一一濕布ニテ拭フヘシ
痰壺ハ毎日一回汚水ヲ廁ニ棄テテ洗ヒ約四分ノ一容量ノ水ヲ入
レ置クヘシ要スレハ消毒液ヲ加フ

患者ノ排泄物ハ病室ニ留ムヘカラス便器ハ用ヒタル度毎ニ洗ヒ
要スレハ消毒スヘシ若醫員ヨリ排泄物ヲ保存スルコトヲ命セラ
レタルトキハ便器ノ蓋ヲ密ニ覆ヒ患者ノ氏名ト排泄時トヲ記シ
タル紙片ヲ貼付シ廁或ハ其ノ廊下ニ置クヘシ排泄物器外ニ溢レ
タルトキハ石灰或ハ灰ヲ撒布シ濕布ニテ拭ヒ取り次ニ石炭酸水

或ハ「クレゾール」水ニテ消毒スヘシ
 汚レタル被服寢具其ノ他濡レタル拭巾雜巾等ハ病室ニ留ムヘカ
 ラス又病室ニ於テ乾カスヘカラス膿等ニテ汚レタル繻帶類ハ一
 定ノ器ニ入レ室外ニ遠サクヘシ
 花卉盆栽等ヲ病室ニ置クコトヲ許サレタルトキモ夜ハ室外ニ出
 スヘシ又無用ノ骨董玩具等モ之ヲ病室ニ置クヘカラス
 喫煙ハ許サレタル患者ニ限り一定ノ場所ニ於テナスコトヲ得看
 護者ハ勤務中喫煙スヘカラス
 病室ノ燈器ヨリ煤煙ヲ發シ又ハ臭氣ヲ放タサル様注意スヘシ

第四 病室ノ換氣

人身ハ健康ト疾病トニ拘ラス常ニ一定量ノ空氣ヲ呼吸シテ生命
 ヲ保ツモノナリ室内ノ空氣ハ人ノ居住ニ依リテ呼吸ニ闕クヘカ
 ラサル酸素次第ニ減シ且皮膚及肺臟ヨリ發散スル炭酸及其ノ他
 ノ有害瓦斯次第ニ増シ遂ニ滿室ノ空氣變敗スルニ至ル之ヲ敗氣
 ト云フ

室内ノ空氣ヲ汚ス原因ハ種種アリ即チ衆人ノ群居數多ノ火燈及
 火爐等ニシテ孰レモ空氣中ノ酸素ヲ消耗シ有害ノ瓦斯ヲ發散ス
 ルモノナリ其ノ他患者ノ蒸發氣分泌及排泄ノ盛ナルモノ創傷ノ
 膿潰スルモノ等モ亦空氣ヲ不潔ナラシム宜シク病室内ノ空氣ヲ
 適當ニ交換(換氣)セシムヘシ但シ感スヘキ氣流(賊風)ヲ生セシ

ムヘカラス

窓ヲ開クハ換氣ノ簡便ナル方法ナリ又特別ノ裝置アリ換氣窓通氣孔等是レナリ正確ニ取扱フトキハ適度ノ換氣ヲ營ムコトヲ得窓ハ成ルヘク上部ヲ開クヘシ患者ニ眞直ニ向ヘル窓ハ開クヘカラス殊ニ發汗スル患者又ハ溫保スヘキ患者アルトキ窓ヲ開クヲ要スレハ患者ニ衾ヲ被ヒ或ハ屏風等ニテ風道ヲ遮リ或ハ患者ヲ風道ノ外ニ移シテ後之ヲ開クヘシ病室ニ入ル空氣ハ清クシテ夏ハ冷ナルヲ要ス窓ヨリ入ル空氣臭アルカ或ハ窓ヨリ夏ノ日光射入スルトキハ窓ヲ開カス寧ロ入口ノ戸ヲ開クヘシ

夜、窓ヲ閉チテ朝ニ至ルトキハ病室ノ空氣大ニ汚ル故ニ朝ハ窓ヲ久シク開キ置クヲ要ス又病室ヲ掃除シ寢臺ヲ整頓シ重症者ノ寢具ヲ交換スルトキ其ノ他食後兩便排泄後爐ヨリ煙漏リタルトキ等ニハ特ニ換氣ヲ要ス

第五 病室ノ溫度

病室ノ空氣ハ一定ノ溫度ヲ保チ急劇ニ冷熱ノ度ヲ變セシムヘカラス即チ夏ハ平等ニ涼シク冬ハ平等ニ暖ナルヲ要ス夏ハ冷ナル外氣ヲ窓ヨリ入ルヘシ時トシテハ盤ニ冷水ヲ盛リテ室内ニ置キ殊ニ重症者ノ寢臺ノ下ニハ冷水或ハ氷ヲ盛リタル盤ヲ置キ又ハ一日數回冷水ヲ室内ニ撒クコトアリ

病室ノ空氣ヲ溫ムルニハ通例煖爐ヲ以テス其ノ溫度ハ攝氏十七度乃至二十度ヲ適當トス空氣ノ乾燥ヲ防ク爲メニハ盤ニ水ヲ充テテ爐上ニ載セ蒸汽ヲ發セシムヘシ

病室ノ溫度ヲ測ルニハ寒暖計ヲ用ヒ爐ノ傍ト日ノ照ル處トヲ避ケ人ノ頭ノ高サニ於テス

寒暖計ニハ攝氏列氏及華氏ノ三種アリ攝氏寒暖計ハ氷點零度沸騰點百度ニシテ列氏寒暖計ハ氷點零度沸騰點八十度ナリ故ニ列氏ノ度ニ五ヲ乘シ四ニテ除スレハ攝氏ノ度ヲ得ヘシ又華氏寒暖計ハ氷點三十二度沸騰點二百十二度ナリ故ニ其ノ度ヨリ三十二ヲ減シ五ヲ乘シ九ニテ除スレハ攝氏ノ度ヲ得ヘシ

第六 病室ノ明暗

光(明)ハ室内ノ乾燥殺菌ノ効アルノミナラス身體ノ新陳代謝ヲ旺盛ナラシメ快活清爽ノ感ヲ喚起スルモノニシテ病ノ回復期或ハ肺結核其ノ他慢性呼吸器病者ハ適宜ニ日光ニ浴シテ効アリ

窓ヨリ入ル光、強キニ過クルトキハ窓掛(窓日覆)ヲ閉ツヘシ又眼病破傷風腦膜炎患者ノ如キハ病室ヲ適宜ニ暗クシテ光ノ刺戟ヲ除クヘシ

夜ノ燈明ハ起キ居ル患者ノ許サレタル事ヲ爲シ得ルヲ度トシ就眠後ハ患者ノ自ラ身ヲ處スルニ足ルヲ度トス

第七 寢臺ノ位置及整頓

患者ノ寢臺ハ成ルヘク壁及他ノ寢臺ヨリ隔タリテ診察及看護ノ

際四方ヨリ患者ニ近ツキ易カラシムヘシ若室内狭キトキハ寢臺ノ頭邊ヲ壁ニ近ツカシムルヲ可トス又爐ニ近ク置クヘカラス但シ已ムヲ得サレハ其ノ間ニ中隔(屏風)ヲ建ツヘシ其ノ他、風ヲ忌ムヘキ患者ノ寢臺ハ屏風ヲ繞ラシテ賊風ヲ遮ルヘシ寢具ヲ整頓シテ安ラカニ臥セシムルトキハ患者ヲ慰ムルコト大ナリ故ニ枕ノ位置ヲ少シク變シ或ハ敷布ノ襞ヲ延ハスカ如キ小事モ忽ニスヘカラス看護者ハ患者及其ノ寢臺ニ注意シ若寢具ノ滑リ落ち或ハ濕リ或ハ不平凹凸等ノコトアルトキハ速ニ之ヲ整頓スヘシ

第八 患者ノ臥位

患者ハ臥褥上ニ頭ヲ適宜ニ高クシ平カニ臥セシムルモノトス然レドモ呼吸困難ナルトキハ上身ノ下ニ毛布等ヲ挿ミテ半坐位ヲ取ラシムルコトヲ得

衰弱或ハ牽引装置ヲ施ス等ニ依リ自ラ起キ得サル患者ニハ天井ヨリ垂レタル繩或ハ寢臺ノ足端ニ結ヘル繩ニ横木ヲ縛リ之ヲ握リテ體ヲ擡ケ得ル如クスルモ可ナリ

第九 患者ノ清潔

患者ノ身體ヲ清潔ニスルハ治療上重要ノコトナリ身體汚レタルトキハ湯ト石鹼トニテ拭フヘシ

輕症者ニハ毎朝自ラ顔及手ヲ洗ヒ齒ヲ磨キ口ヲ漱カシメ重症者

ニハ看護者之ヲ扶ケテ行ハシムヘシ
遺尿或ハ遺尿シタルトキハ汚物ヲ拭ヒ去リ次ニ汚レタル處ヲ洗
ヒ温メタル衣服ヲ著セ敷布等ヲ換フヘシ此ノ際褥瘡ノ發シ易キ
部位ニ注意スヘシ

入浴セシムルコトヲ得ル患者ハ入浴セシメ又入浴セシムルコト
ヲ得サル患者ハ暖ニシテ風ナキ時ヲ選ミテ全身ヲ清拭スヘシ拭
フニハ湯ノミヲ用ヒ或ハ石鹼ト湯トヲ用ヒ又石鹼水若ハ湯ニ酒
精ノ少量ヲ加ヘタルモノヲ用フ

傳染病者癒エタルトキハ爪ヲ剪リ手ヲ消毒シ温カキ昇汞水ニテ
身體ヲ拭ヒ然ル後石鹼ヲ用ヒテ全身浴ヲ行ヒ被服ヲ更フヘシ

第十 患者ノ更衣

重症者ノ被服ヲ更フルニハ看護者ノ介輔ヲ要ス四肢ニ傷アル者
ノ被服ヲ脱セシムルニハ健側ヲ先ニシ著セシムルニハ患側ヲ先
ニスヘシ

冷エ或ハ濕リタル被服ヲ著セシムヘカラス要スレハ爐湯婆等ニ
テ温ムヘシ發汗シタル患者ノ被服ヲ更フルトキハ之ヲ脱スル前
ニ温メタル手巾ヲ以テ衾ノ中ニテ患者ノ身體ヲ拭ヒ感冒セシメ
サルヲ要ス

第十一 患者ノ換褥

先ツ褥ヲ整理シテ平坦トナシ決シテ凹凸不等アルヘカラス敷布

モ皺襞ヲ生セサル様注意スルヲ要ス
重症者ノ寢臺ヲ換フルニハ新シキ寢臺ヲ舊キ寢臺ノ足端ニ整頓
シ置キ看護者ハ患者ノ右ニ(患部右側ナルトキハ左ニ)立チ其ノ
被服ヲ引下ケテ足ヲ包ミ少シク膝ヲ曲ケシメ袈ヲ除キ右臂ヲ深
ク臂ノ下ニ送り左臂ヲ十分ニ背ノ下ニ挿シ入レ次テ患者ヲシテ
自ラ頭ヲ擡ゲ兩手ヲ看護者ノ頸ニ纏ハシメ看護者ハ徐ニ起チテ
患者ヲ新シキ寢臺ニ移スヘシ若患者手ヲ看護者ノ頸ニ纏フコト
能ハサルトキハ他ノ看護者ヲシテ患者ノ頭ヲ保タシムヘシ負傷
者ナルトキハ他ノ看護者ヲシテ傷處ヲ護ラシメテ動搖セサラシ
ムヘシ又二人ニテ換褥ヲ行フトキハ二人皆患者ノ同側ニ立チテ

甲ハ臂ヲ肩ト腰トノ下ニ送り患者ヲシテ兩手ヲ己レノ頸ニ纏ハ
シメ乙ハ臂ヲ臀ト臍トノ下ニ送り甲ノ號令ニ從ヒテ徐ニ一齊ニ
擡ケ新シキ寢臺ニ移スヘシ他ニ寢臺ノ設ケナキトキハ一時他ノ
褥上ニ移シ袈ヲ被ヒ元ノ寢臺ヲ整頓シテ更ニ之ニ移スヘシ
重症者ノ敷布ヲ換フルニハ新布ヲ一邊ヨリ卷キテ中央ニ至リ更
ニ他邊ヨリ卷キ次テ舊布ヲ一邊ヨリ卷キテ患者ノ身體ニ接スル
處ニ至リ豫メ卷キタル新布ニ接シ微ニ患者ノ身體ヲ擡ケテ手早
ク舊布ヲ拔キ去リ新布ヲ展ヘテ患者ノ身體ノ下ニ敷クヘシ又褥
ヲ換フルニハ新褥ト舊褥トヲ相接セシメ置キ患者ヲ擡ケテ舊褥
ヲ一方ニ抽キ去リ他方ヨリ手早く新褥ヲ敷クヘシ

第十二 患者ノ温保

患者惡寒或ハ寒戰スルトキハ衾ヲ増スヘシ
衰弱シ又ハ惡寒アルモノニハ懷爐湯婆熱キ砂ヲ盛リタル器温石
等ヲ與フヘシ此ノ際湯婆等ハ布ニテ包ミ患者ニ火傷セシメサル
様注意スヘシ知覺ヲ失ヒタル患者ニ於テ特ニ然リトス

第十三 患者ノ飲食

陸軍ニテハ患者ノ普通食ヲ並食粥食粥汁ニ別チ各食ニ全食七分食
五分食ノ別アリ又副食ハ並菜軟菜及流動菜ニ別タル
海軍ニテハ患者食ヲ一號食ヨリ四號食ニ別ツ一號食ハ平食ニシテ
平食量稍々少ナキモノヲ二號食トシ半流動食ヲ三號食流動食ヲ四
號食トス

患者ニハ朝食晝食夕食ノ外療養品トシテ牛乳肉汁卵等ヲ與フル
コトアリ其ノ主要ナルモノ次ノ如シ

一、牛乳 煮沸又ハ蒸氣ニテ滅菌シタルモノニアラサレハ與フ
ヘカラス

二、煉乳 煮沸水ヲ以テ約六倍ニ稀釋シ牛乳ノ如ク用フヘシ但
シ熱性病者ニハ十倍以上ニ稀釋スルヲ可トス

三、「クリーム」 煮沸水ヲ以テ約三倍ニ稀釋シ牛乳ノ如ク用フ
ヘシ

四、鶏卵

(一)、半熟卵 鍋ニ湯ヲ沸シ沸騰スルニ至リテ火ヨリ遠ケ之ニ

鶏卵ヲ入レ約十分間ノ後取出スヘシ

- (二)、卵白水 室温ノ煮沸水二五〇瓦ヲ取り之ニ鶏卵一個ノ卵白、砂糖四乃至五瓦及少量ノ食鹽ヲ加ヘ瓶(罎)ニ入レ十分ニ振盪シタル後布ニテ漉スベシ

卵白水ニ武蘭姪酒ノ類少量ヲ加フレハ味良好トナル

- (三)、卵湯 鶏卵一個ノ内容ヲ適宜ノ器ニ取り砂糖四乃至五瓦ヲ加ヘ攪拌シツツ沸湯約二〇〇瓦ヲ注加スヘシ

- (四)、卵黃 少量ノ醬油又ハ食鹽ヲ加ヘテ與フヘシ

五、生肉

- (一)、肉汁^{スープレ} 生肉ノ膜及脂肪組織ヲ去リ細カニ切り又ハ挽キ潰

シ其ノ一定量ヲ取り之ニ倍量ノ水ヲ加ヘ時時攪拌シツツ約二時間冷所ニ放置シタル後徐ニ熱シ約半量トナルニ至リテ放冷シ布ニテ壓漉シ其ノ濾液ニ少量ノ食鹽ヲ加フヘシ

- (二)、肉液 牛肉ヲ厚切りニシ其ノ表面ヲ焼キタル後之ヲ賽ノ目ニ切り布ニテ壓漉シ其ノ濾液ニ少量ノ食鹽ヲ加フヘシ
肉液ハ藥劑ノ如ク少量宛與フルモノナリ

- 六、葛湯 葛粉ト砂糖トノ同量ヲ取り少量ノ水ヲ加ヘテ能ク捏ネ混セ之ヲ攪拌シツツ沸湯ヲ注加スヘシ

葛湯ニ卵黃ヲ加ヘ又ハ沸湯ノ代リニ沸騰牛乳ヲ用フルトキハ榮養ニ富ミ且味良好トナル

七、水飴 其ノ儘又ハ沸湯ニ溶解シテ與フヘシ

消化器疾患新陳代謝病(糖尿病腎臟炎等)又ハ高熱ノ場合ニハ飲食ニツキ特ニ醫員ノ命ヲ受クヘシ若患者ノ嗜好品ヲ請求シタルトキハ醫員ニ申出テ許サレサル飲食物ハ患者ニ與フヘカラス重症者ノ飲食スルトキハ看護者之ヲ世話スヘシ起キ上ルコトヲ得ル者ハ坐セシメ枕等ニテ支フヘシ又起キ上ルコトヲ得サルモノハ頭ヲ少シク高クスヘシ甚シク衰弱シタル者及手指麻痺シ或ハ傷アリテ自ラ飲食スルコト能ハサル者ハ看護者食器ヲ持チテ飲食セシムヘシ此ノ時飲食物ノ熱キニ過キサル様注意シ且前ニ與ヘシモノヲ嚥下セサルニ後ノモノヲ與フヘカラス又飲料ハ器

ノ半以上ニ充タササルヲ可トス

重症者食事ノ時ニ至ルモ眠リ居ルトキハ呼ヒ覺マサスシテ醫員ノ指示ヲ受クヘシ

重症者殊ニ重キ熱病ニテ唇舌乾ケルモノハ精神ノ明ナラサルコト多シ之ニ飲料ヲ與フルトキハ左手ヲ項ノ下ニ入レテ靜ニ患者ノ頭ヲ擡ケ飲料ヲ少量宛度度ニ匙或ハ藥吸吞オスリスヒノミニテ與フヘシ然ラサレハ飲料ノ氣道ニ入ル虞アリ

第二章 各病症ニ應スル看護

第一 褥瘡

重症者久シク臥シ居リテ衰弱甚シク動作自由ナラサルトキハ身

體ノ一部（薦骨部尾骶骨部踵肩胛又久シク横位ヲ取レルモノニテハ跨部）ニ壓ヲ受ケ褥瘡ヲ發スルコトアリ熱性病及神經系病ノ患者ニ於テ殊ニ然リ

褥瘡ハ初メ皮膚赤色トナリ疼痛アリ此ノ時速ニ處置セサレハ皮膚爛レ漸ク皮下ノ軟組織、壞レテ骨ニ達シ遂ニ創傷傳染病ヲ繼發シテ生命ニ危険ヲ及ホスモノナリ

褥瘡ヲ防カンニハ臥位（仰臥側臥）ヲ屢變換シ度敷布等ヲ整頓シ衣服ノ襞ヲ延ヘ異物敷布ノ縫目等皮膚ヲ壓スルモノヲ除キ去リ身體ヲ清潔ニ保ツヘシ褥瘡ヲ發シ易キ部位ハ初ヨリ特ニ屢拭フヲ要ス兩便失禁スルトキハ殊ニ然リ

褥瘡ノ兆アラハ水或ハ水ニ少量ノ醋酒精若ハ果物ノ汁ヲ和シタルモノニテ洗ヒ醫員ニ報スヘシ臥位ハ屢變換シ患部ニハ環狀褥或ハ氷枕ヲ當ツヘシ環狀褥ハ氣密ニ製シタル環形ノ空囊ナリ中ニ空氣ヲ吹き入レ患部ヲ其ノ孔ニ當テテ布クヘシ空氣ハ餘リ多ク吹き入ルヘカラス身體搖キテ安カラサレハナリ又直ニ身體ニ觸レシムヘカラス布片ニテ包ムヘシ環狀褥ニ代用スルニ綿花ヲ環狀トセルモノヲ以テスルコトアリ氷枕ハ「ゴム」製ノ空囊ナリ之ニ攝氏約四十度ノ水ヲ入レ布ニテ包ミ患部ノ下ニ置クヘシ是等ハ使用後要スレハ消毒スヘシ

第二 睡眠

睡眠ハ心身ノ疲勞ヲ回復セシメ精神ノ發揚シテ過敏トナレルヲ鎮靜シ體力ヲ補フモノナリ

健ナル眠ハ安ラカニシテ或ハ仰臥シ或ハ横臥シ眼ヲ閉チ多クハ口モ閉チ顔貌柔和ニシテ鼻ニテ呼吸シ鼻翼動カス刺戟ニ依リテ多クハ容易ニ覺メ直ニ正氣ニ復ス

患者ノ眠ニ就カントスルヤ頻ニ寢返ネガヘリ(輾轉反側)シ驚キテ覺ムルコトアリ疼痛アルモノハ睡眠間大息スルコト多シ顔モ常ナラス色澤惡シ熱アレハ赤ク血液循環ニ障礙アレハ青赤シ眼及唇屢動キテ全ク合ハサルコトアリ寢言ネゴト(嚙語)齒軋ハギシ(切齒)シ呼吸ハ困難ニシテ急シク(促迫)胸ノ病アルモノハ同時ニ咳嗽ス

患者熟睡スルトキハ病勢緩ムコトアリ殊ニ熱性患者熟睡スルトキハ其ノ間ニ發汗シ熱下降シ呼吸安靜トナリ自然ニ覺ムルニ及ヒ輕快スルコト多シ然レトモ熟睡久シキニ過クルトキハ却テ害アルコトアリ睡眠間熱下降セス譫語多キ等ノコトアラハ醫員ノ許可ヲ得テ呼覺スヘシ

不自然ナル睡眠久シク續キテ覺メ難キヲ嗜眠ト云ヒ其ノ睡眠甚タ深ク感覺鈍ク兩便失禁スルニ至ルヲ昏睡ト云フ熱病腦病腸窒扶斯肺炎等ノ初期ノ嗜眠ハ惡徵ナレハ醫員ニ報スヘシ
不眠症ハ嗜眠ノ反對ナリ久シキトキハ衰弱シ神經作用ヲ亂スモノナリ

睡眠ヲ促ス處置左ノ如シ

一、睡眠ニ適當ノ位置ヲ取ラシメ室内ヲ稍暗クスヘシ

各病症ニ應スル看護

- 二、近傍ニテ音響ヲ發スヘカラス私語スヘカラス
- 三、靜ニ話シ或ハ物ヲ讀聞カセテ慰ムヘシ
- 四、四肢ヲ輕ク靜ニ摩ルヘシ
- 五、夏ハ室内ヲ冷シクシ又熱性患者ニハ清涼飲料ヲ與フヘシ
- 六、發汗シタルトキハ襯衣或ハ上衣又ハ濕リタル敷布等ヲ換フヘシ

睡眠ヲ促ス藥ハ醫員ノ處方ニ依ル

睡眠ヲ防ク處置左ノ如シ

- 一、室内ノ空氣ヲ爽ニシ晝ハ窓掛ヲ排キ夜ハ燈ヲ明クスヘシ
- 二、上身ヲ高クシ坐位ニ近カラシムヘシ

三、睡眠セントスルトキ問答或ハ談話シテ覺メシムヘシ

四、時時清涼飲料ヲ與フヘシ

五、嗅藥（「アンモニア」水等）ヲ用フルコトヲ得

第三 皮膚及發汗

患者ノ皮膚ノ觀察モ亦看護上須要ナリ其ノ色蒼白ナリヤ紅ナリヤ青赤ナリヤ黄ナリヤ色澤平等ナリヤ斑點アリヤ斑點アラハ其ノ大小形狀及隆マレルヤ否ヤ等ニ注意スルヲ要ス衰弱シタル患者ノ皮膚ハ蒼ク弛ミテ皺アリ又病ニ依リテハ皮膚光リテ張りタルアリ此ノ場合ニハ指ニテ壓シ其ノ痕ノ消ユルヤ否ヤニ注意スヘシ

患者發汗ノ有無多少ヲ檢シ且全身ニ發汗スルヤ一局部ナルヤ其ノ汗ハ異臭ヲ帶フルヤ粘レリヤ色ツキタリヤ冷ナリヤ或ハ温ナリヤ

各病症ニ應スル看護

又發汗ノ續クコト長キカ短キカ等ヲ觀察スルヲ要ス

發汗スル者ニハ衾ヲ被ヒ風ニ當ラサラシムヘシ冷シテ發汗ヲ止ムヘカラス發汗終ルトキハ溫メタル手巾ヲ取り衾中ニ於テ身體ヲ拭ヒ乾キテ溫ナル襯衣或ハ上衣ヲ著セシムヘシ發汗ト同時ニ大小便ヲ催シ發汗ノ止ムヲ待ツコト能ハサルトキハ尿器或ハ便器ヲ溫メテ衾中ニ入レ排泄セシムヘシ

室内ノ溫度ヲ過度ニ高メ又ハ餘リニ多ク衾ヲ被ヒ發汗セシムヘカラス發汗ヲ促スニハ適度ニ室内ヲ溫メ溫キ飲料ヲ與フヘシ

第四 呼吸

健康ナル大人ノ呼吸ハ一分間十五乃至十八回トス呼吸數ヲ測ル

ニハ口鼻ノ前ニ手ヲ出シ又ハ胸若ハ上腹ニ輕ク手ヲ觸レ成ルヘク患者ノ注意ヲ惹カサル様其ノ數ヲ算フヘシ又我眼ト患者ノ胸若ハ上腹トノ間ニ時計ヲ保チ患者ニ觸レス胸若ハ上腹ノ運動ヲ算フヘシ呼吸數ハ通常體溫表ニ記入ス

患者ノ呼吸ハ靜ナリヤ速ナリヤ深長ナリヤ淺小ナリヤ整ナリヤ不整ナリヤ容易ナリヤ困難ナリヤ鼻ヨリスルヤ口ヨリスルヤ等ヲ觀察スヘシ

呼吸ニ兩式アリ主ニ胸部ヲ以テスルヲ胸式呼吸、腹部ヲ以テスルヲ腹式呼吸ト云フ呼吸困難ノ場合ニアリテハ肩胛頸部鼻翼等ノ副呼吸筋ノ呼吸ニ參加スルコトアリ

呼吸ニ疼痛ヲ覺ユルモノハ吸息毎ニ顔ヲ蹙ムルヲ以テ之ヲ察スヘ

シ呼吸ニ種々ノ雜音(水泡音笛聲喘鳴等)アルコトアリ鼻腔ハ乾ケル
コトアリ粘液ヲ出スコトアリ時トシテ出血スルコトモアリ又鼻腔
ヨリ呼吸スル氣息ニ惡臭ヲ帶フルコトアリ深ク吸息スレハ咳嗽ヲ
促スコトアリ

第五 咳嗽及咯痰

咳嗽ハ時ニ發作性時ニ持續性ニ來ル咳嗽ニ依リテ咯出シタル痰
ニハ粘液様ナルアリ膿様ナルアリ血液ヲ交フルアリ惡臭ヲ放ツ
アリ
咳嗽アル患者ニハ水或ハ消毒液(痰ノ傳染性ヲ有スルトキ)ヲ盛
リタル蓋^{フタ}附痰壺ヲ給シ其ノ中ニ咯出セシメ決シテ嚥下セシムヘ
カラス

重症者強キ咳嗽ヲナストキハ看護者ハ一手ニテ其ノ前額ヲ支ヘ
他手ニ痰壺ヲ把リテ口ノ前ニ保ツヘシ咯出シタル後、口ノ周圍
ニ附キタル粘液ハ紙綿紗或ハ脫脂綿等ニテ拭ヒ取り一定ノ器ニ
入レ置キ燒キ棄ツヘシ

咳嗽ノ狀況及咯痰ノ性質ハ綿密ニ注意シ醫員ニ報スルヲ要ス
痰壺ハ毎日洗ヒ要スレハ消毒シ検査ニ供スル痰ヲ取りタル痰壺
ニハ患者ノ氏名ヲ記シタル紙ヲ貼ルヘシ

第六 心動及脈搏

健康ナル大人ノ脈搏ハ一分時間ニ六十乃至八十ナリ然レトモ心
身ノ状態ニ依リテ増減アリ初生兒ニ於テハ百二十乃至百四十ト

各病症ニ應スル看護

ス患者ニ依リテハ大人ト雖頻數ニシテ百二十以上ニ達シ又ハ緩徐ニシテ五十以下ニ至ルコトアリ

脉搏ヲ算フルニハ示指中指環指ノ三指ヲ竝ヘテ腕關節ノ上ニテ橈骨下端ノ内側ヲ輕ク按シ他手ニ時計ヲ持チ一分時間算フヘシ脈數ハ體溫表ニ記スヘシ

脉搏ノ性質ニハ大小強弱硬軟虛實等ノ別アリ其ノ調節ヲ失ヒタルヲ不整脈ト云ヒ殊ニ忽然一二回搏動ノ缺ケタルヲ結代脈ト云フ脉搏ノ性質ハ看護上最必要ナルモノナルヲ以テ看護者ハ常に實地ニ就キテ習得スルコトヲ怠ル可カラス
多量ノ血液ヲ失ヒタル者及長キ病ノタメ甚シク衰弱シタル者ニ

アリテハ脈搏細小微弱トナリテ指ニ應セサルコトアリ此ノ時ニハ手ヲ心臟部ニ當テ心動ヲ算ヘ心動モ手ニ應セサルトキハ耳ヲ心臟部ニ當テ心音ヲ聽クヘシ

第七 體溫

健康ナル人ノ體溫ハ攝氏三十六度三分乃至三十七度ニシテ一日中多少ノ上下アリ患者ニ於テハ上リテハ四十一度以上ニ、下リテハ三十五度以下ニ至ルコトアリ

體溫ハ體溫計(攝氏檢溫器)ニテ測ルモノニシテ同器ニハ通例三十四乃至四十三度ヲ盛り更ニ其ノ一度ヲ十分シアリ
體溫ヲ測ルニハ腋窩ヲ拭ヒ乾カシメ體溫計ノ水銀ノ下リ居ルヤ

第百二十圖



衣ノ挾マラサル様注意スヘシ(第百十二圖)

腋窩ニ體溫計ヲ插ミテ十分時間ヲ經ルトキハ靜ニ之ヲ拔キ若ハ拔カスシテ其ノ度ヲ檢シ更ニ三分時間ヲ經タル後再ヒ其ノ度ヲ檢シ此ノ二回ノ度一致スルヲ要ス若一致セサルトキハ更ニ二三分時間ヲ經タル後其ノ度ヲ檢シ水銀ノ上ルコト全ク止ムニ至リ

ヲ檢シ水銀槽部ヲ深ク腋窩ニ插ミ同側ノ上膊ヲ胸ニ押シ付ケ體溫計ノ拔ケ落ツルヲ防クヘシ但シ此ノ際他手ヲ上膊ニ添ユルヲ可トス又水銀槽部ノ腋窩ノ後ニ拔ケ出テサル様及水銀槽部ト皮膚トノ間ニ襯

テ最後ニ得タル度ヲ正シキ體溫トス但シ銳敏ナル體溫計ニテハ此時間ヲ短縮スルコトヲ得體溫ハ體溫表ニ記スヘシ

稀ニ口中若ハ肛門ニテ體溫ヲ測ルコトアリ肛門ニテ檢溫スルニハ患者ヲ横臥セシメ看護者一手ニテ臀ヲ押シ開キ他手ニテ體溫計ノ油ヲ塗リタル水銀槽部ヲ肛門ニ當テ輕ク廻シツツ後上方ニ向ケテ挿シ入ルヘシ此ノ間患者ハ靜ニナシ居ラシムルヲ要ス肛門ニテ測リタル體溫ハ腋窩ニテ測リタルモノヨリモ約五分高シ體溫ハ通例毎日二回即チ朝ハ六時ト七時トノ間ニ夕ハ五時ト六時トノ間ニ測ルヘシ但シ醫員ノ命ニ依リ一日數回測ルコトアリ體溫ノ平溫ヲ超ユルモノヲ熱ト云フ熱ハ數週續クコトアリ數時

數日ニシテ解熱スルコトアリ發熱解熱孰レモ緩ナルト急ナルト
アリ汗ヲ出シテ俄ニ解熱スルヲ分利ト云ヒ數日ニ亙リテ徐ニ解
熱スルヲ散渙ト云フ夕ノ體溫ハ多クハ朝ヨリ高シ其ノ一日中ニ
於ケル熱ノ最高ト最低トノ差ヲ日差ト云フ
熱ノ種類ニ左ノ三種アリ

- 一、稽留熱 日差一度以内ノモノ
- 二、弛張熱 日差一度以上ノモノ
- 三、間歇熱 高キ熱發作スルモ最低ハ平溫以下ニアリテ全ク
熱ノナキ時アルモノ

體溫計ハ使用後、布ニテ拭フヘシ又傳染病者ニ用フルモノハ一

定シ置キ使用ノ後消毒スルヲ要ス

體溫計ハ正規檢溫器ト較ヘタルモノ(檢定済)ナルヲ要ス體溫計
ノ外鞘ニハ度目矯正表ヲ附スルヲ例トス之ニ依リテ溫度ノ差異
ヲ加減スヘシ

留點(示極)體溫計ハ腋窩ヨリ抜キ出シタル後水銀柱上リタル處
ニ止マリテ下ラサルモノナリ檢溫後振り動カシテ之ヲ下ラシム
ヘシ

第八 口腔及咽頭

熱アルトキハ唇及舌乾燥シ裂ケ(龜裂)テ出血ス又白色或ハ褐色
乃至煤色ノ苔ヲ被ムリ粘膜ニ白色斑點水泡等ヲ見ルコトアリ其

ノ渴スルモノニハ少量ノ水或ハ清涼ノ飲料ヲ與ヘ唇ニハ「グリセリン」水或ハ「オレーフ」油ヲ塗り舌ヲ清水又ハ藥液ニテ濕シタル布ニテ拭ヒ或ハ含漱セシムヘシ

又時トシテ口中ニ不快ノ臭氣アルコトアリ流涎スルコトアリ口腔ヲ檢スルニハ口ヲ開キテ舌ヲ前方ニ出サシメ咽頭ヲ檢スルニハ舌ヲ長ク前方ニ出シテ「アー」ノ音ヲ發セシメ又ハ布ニテ舌尖ヲ包ミテ之ヲ保持シ又ハ壓舌子ヲ以テ舌ヲ壓スルトキハ之ヲ望ムコトヲ得咽頭ニ在リテハ粘膜ノ潮紅セルヤ義膜ノ附著セルヤ扁桃腺ニ腫大又ハ白色斑點ノ附著セルヤ否ヤニ注意スヘシ

第九 流涎

流涎トハ唾液ノ過度ニ流溢スルヲ云フ流涎ニ處方セラレタル含漱藥ハ屢用ヒシムヘシ而シテ唾液ハ痰壺ニ、含漱藥ハ膿盤等ニ吐カシムヘシ
流涎患者ハ仰臥セサルヲ要ス縦ヒ仰臥セシムルコトアリテモ此ノ位置ニテ睡眠セシムヘカラス是レ唾液ヲ嚥下シ或ハ氣道ニ入ルノ虞アレハナリ

第十 嘔吐

患者嘔吐スルトキハ坐シ或ハ横臥セシムヘシ頭ヲ寢臺ヨリ低ク垂レシムルハ害アリ看護者ハ一手ヲ患者ノ前額ニ他手ヲ後頭ニ當テテ頭ヲ支ヘ大ナル器ニ吐物ヲ受クヘシ又嘔吐ノ際ハ被服ノ

束縛ヲ解クヘシ

嘔吐ヲ催スモ之ヲ抑制シテ遂ニ耐フヘカラサルニ至リ一度ニ吐出セシムヘシ

嘔吐ヲ催サシムル爲メ吐劑ヲ與フルトキハ是ニ先チ湯或ハ薄キ粥汁若ハ肉汁等ヲ與ヘテ吐出シ易カラシムルコトアリ

嘔吐止マサルトキハ少量ノ清涼飲料或ハ沸騰散若ハ小サキ氷片ヲ與フヘシ又少量ノ茶或ハ「コーヒー」ヲ與フルコトヲ得

嘔吐終ラハ水ニテ含漱セシメ吐物ハ直ニ病室外ニ遠サクヘシ

嘔吐物ハ多クハ胃内容物ニシテ其量多キハ數立ニ至ルコトアリ又一盞ニ足ラサルコトアリ粘液膿汁血液ヲ含ムモノアリ或ハ腸内

容ノ之ニ混シテ黄綠色ナルアリ米泔汁様ナルアリ又糞臭ヲ帶フルモノアリ看護者ハ其ノ量色反應臭氣其他ノ性狀ニ注意シテ醫員ニ報スヘシ

「クロロフォルム」服用中或ハ卒倒者ノ如キ知覺喪失時ニ於ケル嘔吐ニ對シテハ特ニ注意ヲ要ス即チ頭首ヲ横ニシ吐物ノ氣道ニ流入スルコトヲ防カサルヘカラス

第十一 便 通

便所ニ行クトキハ足袋(靴下)上靴ヲ穿チ要スレハ毛布等ヲ著セシムヘシ病室内ニテ便器ニ就カシメタルトキハ其ノ都度便器ヲ室外ニ遠サクヘシ

衰弱シタル者或ハ患部ニ依リテ寢臺ヲ離ルルコト能ハサル者ハ
便器ヲ適宜ニ温メ衾中ニ挿シ入ルヘシ患者ノ上身ヲ高クスルト
キハ便通容易ナリ

大便失禁スル者ハ成ルヘク別室ニ臥セシメ臀ノ下ニ防水性ノ物
ヲ敷キ綿花或ハ布片ヲ肛門ニ當テ置クヘシ便通後ニハ直ニ清メ
要スレハ被服ヲ更フヘシ

便器ハ使用後直ニ洗ヒ要スレハ消毒スヘシ便器ヲ要スル重症者
多キトキハ一人毎ニ一箇ノ便器ヲ備フルヲ可トス

便通ハ秘結セリヤ下痢セリヤニ注意スルヲ要ス而シテ大便ノ性
状ニハ硬軟水様血様膿様泡沫様等アリ色ニ淡褐暗褐黑白アリ又

綠色ヲ帶フルアリ臭氣ノ常ニ異ルアリ一晝夜間ノ便通ノ回數及
一回量ノ多少ハ性状ト共ニ之ヲ審ニスヘシ

大便中ニ粘液粘膜片血液結石片寄生蟲等アルトキハ醫員ノ命ナ
キモ検査ヲ受クルヲ要ス検査ヲ要スル大便ハ蓋ヲ密ニシ器毎ニ
患者ノ氏名ヲ記シタル紙ヲ貼リ便所或ハ便所ノ廊下ニ置クヘシ

第十二 放尿

尿器ヲ要スル患者横臥シ或ハ伏シテ放尿スルヲ嫌フトキハ起コ
スモ可ナリト雖此ノ際感冒セシメサル様注意スヘシ

衰弱シタル者或ハ小便失禁スル者ニハ硝子製尿器ヲ跨間ニ入レ
置キテ放尿セシムヘシ患者靜ナルトキハ看護者時時之ヲ點檢ス

ルノミニテ尿器ハ其ノ儘ニナシ置クモ可ナリ但シ此ノ場合ニハ尿器ヲ布ニテ包ミ用フヘシ
 尿器ハ使用後直ニ洗ヒ要スレハ消毒スヘシ器ニ固著シタル尿渣ヲ去ルニハ稀鹽酸ニテ洗フヲ可トス又熱湯ニテモ除クコトヲ得
 尿ニ就テハ其ノ回數量色臭氣及溷濁ノ有無ニ注意スヘシ検査ヲ要スル尿ハ尿器ニ取リタル儘或ハ他ノ一定ノ器ニ移シテ患者ノ氏名ヲ記シタル紙ヲ貼リ置クヘシ
 尿閉ノ場合ニハ醫員ニ報ス但シ臨機導尿法ヲ行フコトアリ

第三章 傳染病者ノ看護

傳染病ハ多クハ重症ナルト他人ニ傳染スル虞アルトニ依リ注意

ヲ要ス

傳染病者ハ他ノ患者ト隔離シ醫員看護婦ノ外出入ヲ禁シ病室内ニ無用ノ物品ヲ入ルルコトナク掃除清拭ニ易カラシメ又其ノ被服寢具等ハ他ノ患者ニ用フヘカラス

傳染病者ノ看護者ハ他ノ看護者トナルヘク交通スルコトヲ避クヘシ又傳染病室ニハ其ノ看護ニ關係セサル他ノ看護者出入スヘカラス

傳染病者ノ被服繃帶材料等ハ病室内ニテ消毒液ニ浸シ又ハ消毒液ニ浸セル布ニ包ミ室外ニ出シ消毒スヘシ傳染病者ノ便器尿器痰壺等ニハ消毒液ヲ盛ルヲ要ス又使用後毎回洗ヒ消毒スヘシ

傳染病者ノ食器及之ニ用ヒタル體溫計等ハ消毒シタル後ニアラサレハ他ニ用フヘカラス傳染病者ノ浴水浴槽ハ消毒スルヲ要ス消毒法ニ就テハ第九編消毒ヲ參照スヘシ

傳染病者ノ看護者ハ特ニ身體(殊ニ手)及被服ノ清潔ニ注意シ食前ニハ含漱ヲ行ヒ手ハ必ス消毒スヘシ患者若ハ看護ニ用フル器具等ニ手ヲ觸レタルトキ亦其ノ都度消毒ヲ要ス便所ハ一定ノモノノ外入ルヘカラス病室ヲ去ルトキハ手ノ消毒ハ勿論、入浴ヲナシ看護衣及上靴ハ之ヲ脱キテ一定ノ場處ニ留ムヘシ

傳染病毒侵入ノ門ハ疾病ノ種類ニ依リ榮養器呼吸器創等ヨリスルモノナルヲ以テ看護者ハ能ク侵入ノ門ニ注意シテ感染ヲ防禦

シ若違和ヲ感スルトキハ速ニ診斷ヲ請フヘシ

第四章 精神病者ノ看護

精神病者ハ精神ニ病アルノミナラス多クハ身體ニモ病アリ看護者ハ殊ニ憐ミヲ垂レ一層鄭重ニ取扱フヘシ精神病者ノ言行ハ責任ナキモノナリ假令罵詈訶弄或ハ暴行ヲ加フトモ堪忍シテ溫和ニ看護スヘシ

精神病者ハ己レヲモ人ヲモ害セントスルコトアリ故ニ別室ニ入レ看侍ヲ怠ルヘカラス

看護者懇諭スルモ飲食セサル精神病者アリ此ノ如キハ饑餓ヲ覺ユルニ至レハ自ラ飲食ヲ求ムルコトアリ故ニ飲食物ヲ室ノ隅ニ隠スマネシテ患者ノ之ニ心附カサル如クシ其ノ室ヲ去ルトキハ患者急ニ取リテ食スルコトアリ然レトモ如何ニスルモ飲食セサレハ醫員

ノ命ニ從ヒ人工榮養法ヲ施スヘシ
 精神病者中ニハ衣食其ノ他總テノ物品ヲ汚スコトヲ好ム者アリ故
 ニ其ノ身體及被服ノ清潔ニハ殊ニ注意スヘシ
 精神病者ハ多言スルアリ沈黙スルアリ多言シテ其ノ言フ所種種ニ
 錯亂セルアリ沈黙ニシテ一處ヲ凝視スルアリ侮辱或ハ脅迫ヲ受ク
 ルカ如キ狀ヲナシテ室ノ隅ニ伏シ耳目ヲ蔽フアリ五官ニ異常アル
 アリ一觀察スルヲ要ス
 遁逃或ハ自殺ヲ企ツル精神病者ハ斷ニス其ノ傍ニ看侍スルヲ要ス
 故ニ小刀或ハ其ノ他ノ危險物ヲ携ヘタルトキハ之ヲ欺キ取り又ハ
 竊ニ納メ置クヘシ

第五章 褥婦ノ看護

産褥トハ分娩ノ終リタル時ヨリ妊娠ノ爲ニ變リタル生殖器及全

身狀態ノ悉ク回復スルニ要スル六週日乃至八週日間ヲ云ヒ産褥
 中ノ婦人ヲ褥婦ト云フ

褥婦ハ病ニ罹リ易ク且重症トナリ易シ縦令病ヲ起スコトナキモ
 産褥中ノ不攝生ハ其ノ回復ヲ妨ケ生殖器ノ疾病ヲ遺スコトアリ
 子宮ハ分娩後直ニ之ニ觸ルレハ殆ト小ナル兒頭大ニシテ其ノ底
 部ハ臍ノ高サ或ハ稍其ノ上ニアリ第二日或ハ第三日ヨリ次第ニ
 下リ第九日乃至第十日ニハ耻骨縫際ノ上ニ觸ルルコト能ハサル
 ニ至ル分娩後二三日間ハ此ノ子宮收縮著シク子宮ハ時時硬クナ
 リ陣痛ノ如キ痛アリ之ヲ後陣痛ト云フ

子宮ノ内面ハ後産ノ剝離セル創面ヲ呈シ惡露オロ(おりもの)ヲ排泄

ス惡露ハ初メ二日間ハ殆ント純粹ノ血液ニシテ膿粘液ヲ混シテ
 稍粘リ第四日頃ヨリ次第ニ薄クナリ血液モ減シテ淡赤色トナリ
 第九日頃ヨリハ灰白色トナル而シテ惡露ハ其ノ色薄クナルニ從
 ヒ量モ減シ第五週ノ頃全ク止ム惡露ノ排泄止ムトキハ子宮内面
 ノ創傷ハ治癒シタルコトヲ示スナリ
 惡露ハ子宮腔内ニテハ毒性ヲ有セスト雖一旦腔内ニ下ルトキ此
 處ニ病芽アレハ傳染性ノ有毒物トナリ產褥傳染病ヲ誘起スルコ
 トアリ

分娩後褥婦ハ爽快ヲ感シ疲勞ノタメ睡眠ヲ催スモノナリ體溫ハ
 十二時間以内ニテハ三十八度以下ノ微熱ヲ發スルコトアリ更ニ

十二時間ヲ經レハ平溫ニ復ス脈搏及呼吸ハ概ネ緩徐ナリ大便ハ
 秘結シ易ク又尿ノ量ハ増加ス産後一二日間ハ時トシテ自ラ排尿
 シ能ハサルコトアリ褥婦ハ最初約八日間ハ甚タ發汗シ易ク皮膚
 ハ常ニ濕ヘリ斯ク發汗惡露排泄其ノ他授乳等ノタメ褥婦ハ多量
 ノ水分ヲ出スヲ以テ口渴ヲ覺フ食慾ハ初メ二三日ハ減スト雖其
 ノ後増進ス殊ニ授乳スル褥婦ニ著シ

褥婦ノ身體ハ極メテ安靜ナルヲ要ス分娩後七日乃至十日ハ主ト
 シテ仰臥位ヲ取ラシムヘシ子宮ノ收縮佳良ニシテ惡露モ亦過多
 ナラサルトキハ左右交代ニ第三四日頃ヨリ時時側臥セシメ第二
 週ノ始メヨリ床上ニ起坐シ第十四日頃ヨリ徐ニ離褥セシメテ可

ナリ起立早キニ過クルトキハ子宮ノ回復ヲ妨ケ生殖器ノ病ヲ發シ惡露モ久シク續クノミナラス時トシテハ恐ルヘキ出血ヲ起スコトアリ

褥婦ノ看護ニハ消毒法ヲ嚴守スヘシ殊ニ外陰部ハ惡露ノ爲メ汚染シ易キヲ以テ一〇%「リゾール」濕布ニテ拭ヒ消毒セル綿紗又ハ綿花ヲ貼シ丁字帶ニテ固定シ毎日交換スヘシ
褥婦ハ惡露ノ排泄及發汗多量ナル等ノタメ身體不潔トナリ易キヲ以テ殊ニ其ノ清潔ニ注意シ襯衣ハ屢交換シ又全身ハ湯ニテ拭フヘシ全身浴ハ四週間ノ後ニ許スヘキモノナリ
褥婦ノ食物ハ分娩後三日間ハ牛乳肉汁鷄卵粥汁等ノ流動性食物

ヲ與ヘ第四日ヨリ次第ニ固形ノ食物トナシ且滋養品ヲ與フヘシ一週間後ニ至レハ常食ニ復セシム

授乳ハ生兒ノ健康ヲ保ツニ必要ナルノミナラス褥婦ハ之ニ依リテ食慾ヲ増シ榮養ヲ良クシ且子宮ノ回復ヲ促シ産褥ノ經過ヲ良ナラシム

乳房ハ妊娠中稍増大シ其ノ末期ニ之レヲ壓スレハ水様ノ薄キ汁(初乳)ヲ分泌ス分娩後二三日ヲ經レハ著シク腫脹シ感覺鋭敏トナリ漸漸常乳ヲ分泌スルニ至ル

乳ハ劇シキ感動アルトキハ其ノ分泌量減シ或ハ其性質ヲ變ス病ニ依リテハ其ノ病毒乳中ニ移リ行キ又多クノ藥物ハ服用後乳中

ニ發現ス其ノ他食物ノ成分モ亦乳中ニ移リ行キ屢其ノ性質ヲ變スルモノナリ

褥婦ハ分娩後七八時間ヲ經テ授乳ヲ始メシムルモ可ナリ初メ二三日間ハ初乳ヲ分泌シ其ノ量不十分ナレトモ哺乳スルトキハ乳房刺戟セラレ分泌次第ニ増量ス普通量ノ分泌ヲ始ムルニ至レハ時間ヲ定メテ授乳セシム即チ晝間ハ初ハ毎二時間少シク經過セハ毎三時間夜間ハ概ネ毎四時間トシ一回十五分乃至二十分トナス而シテ左右ノ乳房ヲ交ル交ル飲マシムヘキモ一回ノ授乳ニハ左右孰レカ一側ノミヲ飲マシムヘシ授乳ノ前後ニハ乳嘴ト小兒ノ口中トヲ硼酸水ニ浸シタル綿紗又ハ綿ニテ拭フヲ要ス若乳頭

赤色トナリ爛レントスルトキハ授乳後硼酸「ワゼリン」等ヲ塗リ置クヘシ

乳ノ分泌少ナキトキハ牛乳其ノ他ノ滋養ニ富メル飲料ヲ與ヘ且屢哺乳セシメテ乳房ヲ刺戟スヘシ分泌少ナキタメ授乳ヲ廢スルコトハ宜シカラス又乳ノ分泌多キニ過キ乳房張り疼痛アル場合ニハ飲料ヲ少ナクシ繃帶ニテ乳房ヲ擧ケ置クヘシ妄リニ搾リ出スハ却テ分泌ヲ増サシムルモノナリ

褥婦ノ授乳ヲ禁スルハ脚氣結核精神病ノ如キ病アルカ或ハ乳房ニ創傷アルカ又虛弱ニシテ榮養不良ナルカ若ハ褥婦自ラ病アリト感スルトキ等ナリ此ノ如キ場合ニハ必ス醫員ノ命ヲ受クヘシ

第六章 哺乳兒ノ看護

第一年ニ於テハ小兒ヲ毎日入浴セシムヘシ浴温ハ攝氏三十七乃至四十度トス入浴ノトキニハ一手ニテ小兒ノ頭ヲ支ヘ他手ニテ小兒ノ身體ヲ軟カニ海綿等ニテ洗ヒ次テ浴ヨリ出シテ準備セル浴布ノ上ニ臥サシメ身體ヲ拭ヒ乾カシ頸腋窩鼠蹊ノ如キ擦傷ヲ生シ易キ處ニ澱粉亞鉛華等ノ細粉ヲ撒布シ然ル後被服ヲ著セテ臥サシムヘシ

小兒ハ成ルヘク母ト共ニ臥サシメサルヲ可トス小兒ヲ抱キ臥ストキハ睡眠中ニ窒息セシムルコトアリ

小兒泣クトキ必スシモ抱キ起シテ慰ムルニハ及ハス身體濕ヒタルトキ之ヲ拭ヒ乾カス様注意スレハ足ル泣クコトハ小兒ニ害ナシ

特ニ注意スヘキハ臍帶ノ殘痕ナリ清潔ニ保ツヲ要ス若臍部ヨリ出血スルカ或ハ赤クナリ腫レタルトキハ直ニ醫員ニ報スヘシ

授乳ニ就テハ前章産褥ヲ參照スヘシ

小兒若母乳又ハ乳母ノ乳ヲ得ルコト能ハサルトキハ人工榮養ヲ爲スヘシ人乳ノ代用品ハ牛乳ヲ可トス牛乳ハ新鮮ニシテ一日煮沸消毒シタルモノヲ用フルヲ要ス

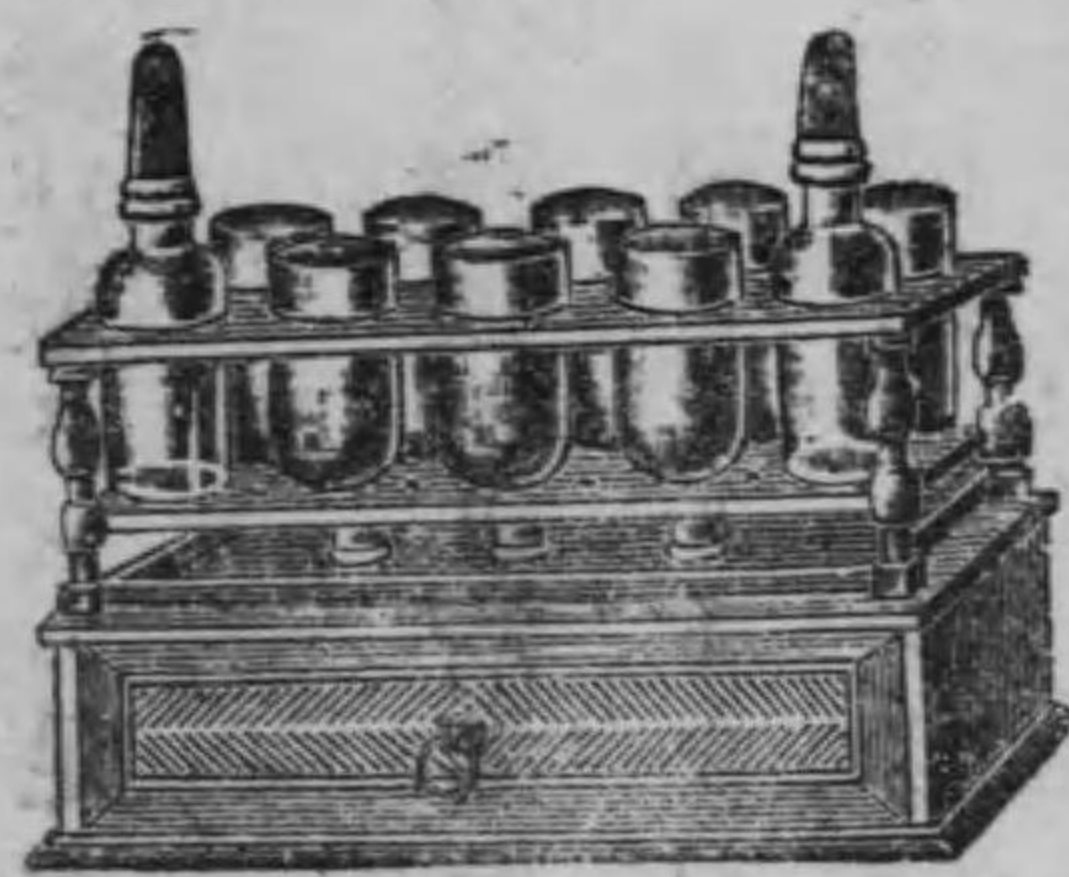
牛乳ハ人乳ヨリモ消化シ難ク且甘味少ナキカ故ニ適宜ニ稀メ乳糖或ハ砂糖ヲ加フヘシ牛乳ヲ稀ムル割合ハ左ノ如シ

- 一、生後八 日間ハ 牛乳一分水三分
- 二、初ノ三箇月間ハ 牛乳一分水二分
- 三、次ノ三箇月間ハ 牛乳一分水一分
- 四、次ノ三箇月間ハ 牛乳二分水一分
- 五、以後ハ 純 牛 乳

第百三十圖



乙



丙



但シ此ノ稀ムル順序ハ決シテ急ナルヘカラス初メノ三箇月ノ終リノ三週ニ於テ次第ニ増シ次ノ三箇月ノ初ニ至リ適當ノ分量ニ達セシムルヲ可トス

牛乳ヲ稀ムル割合ハ大略上記ノ如シト雖小兒ノ健康状態ノ如何ニ依リテハ其ノ稀メ方ヲ異ニスルモノナリ

牛乳ヲ消毒スルニハソックスレーノ装置ヲ用フ(第百十二圖)此ノ装置ハ稀メタル牛乳ノ一日量ヲ八乃至十瓶ニ分チ各巧妙ナル栓ニテ密閉セルモノナリ之ヲ熱湯ノ入りタル器中ニ入レ十五分時間煮沸消毒シタル後之ヲ冷處ニ貯ヘ置キ用フルトキニハ其ノ一瓶ヲ温湯ニ入レテ温ムヘシ但シ煮沸十五分時以上ナルトキハ牛

哺乳兒ノ看護

乳變化シテ不良トナル

此ノ装置ナキトキハ一度ニ煮沸シタル一日量ノ牛乳ヲ瓶ニ入レ
密栓シテ貯フルカ或ハ臨時ニ調製スヘシ

乳瓶ハ飲用セシムル前ニ必ス温ムルヲ要ス其ノ温度ハ瓶ヲ己レ
ノ頬ニ當テテ試ムヘシ

人工榮養ニ用フル乳瓶等ハ毎日少ナクモ一度曹達水ヲ以テ洗フ
ヘシ

第七章 瀕死者ノ看護

患者ノ死ニ迫リタル状態(瀕死)ハ看護者タル者熟知スルヲ要ス
呼吸緩徐困難トナリ鼻翼蠢動シテ喘鳴ヲ帶フルニ至リ脈膊ハ疾

數細小トナリ面色蒼白唇青ク顔貌變シ鼻尖銳ク眼球陷没シ下瞼
及下顎垂レ顔ニ冷汗ヲ流シ往往兩便失禁シ手足ノ運動ニ力無ク
四肢冷却シテ指趾端青赤色ヲ呈ス既ニシテ呼吸益淺表トナリ角
膜反應ハ消失シ遂ニ下顎呼吸ヲ爲シツツ絶息ス瞳孔ハ死ト同時
ニ散大ス

瀕死ハ直ニ醫員ニ報シ死ニ至ルマテ看護ヲ怠ルヘカラス

瀕死者アルトキハ靜ニ歩ミ騷擾ヲ避クヘシ瀕死者ハ別室ニ入レ
置クヲ常トスレトモ若同室ナルトキハ屏風ヲ繞ラシテ他ノ患者
ニ見セサラシムヘシ

藥劑ヲ與フヘキ命アルトキハ之ヲ與ヘ其ノ他時時水ヲ與ヘ新シ

キ空氣ヲ送り汗ヲ拭ヒ四肢ヲ温メ蠅蚊ヲ逐フ等十分ニ看護シ安
ラカニ瞑セシムヘシ

第八章 死後ノ處置

患者死スルトキハ布ニテ顔ヲ被ヒ醫員ニ報シテ検査ヲ請ヒ命ヲ
待チテ屍室或ハ別室ニ移シ不用ノ衾等ヲ除クヘシ

死後強直ノ發セサル前ニ身體ノ位置ヲ正シ納棺ニ便ナラシム若
死後眼開キ居ルトキハ指ニテ閉チ暫ク壓シテ指ヲ放チ口開キ居
ルトキハ下顎ヲ支ヘ已ムコトヲ得サレハ顎ニ布ヲ掛ケテ結フヘ
シ

頓死者又ハ死セルコト確ナラサルモノハ醫員ノ死ト認ムルマテ

被服ノ緊縛ヲ緩メ衾ヲ被フテ暖ナル室ニ置クヘシ

傳染病者死シタルトキハ其ノ被服ニ消毒液ヲ撒布シ消毒液ニテ
濡シタル布ニテ顔及手足或ハ全身ヲ包ムヘシ

第七編 治療ノ介輔

看護者ハ醫員ノ命ニ依リ治療ノ介輔ヲナス此ノ介輔ハ人命ニ關スルヲ以テ細心注意シテ正確ヲ期スヘシ
 回診ノ時又ハ臨時ニ治療ノ介輔ヲ醫員ヨリ命セラレタルトキハ筆記シ置クヲ要ス但シ二人以上ノ看護者同時ニ命セラレタルトキハ故參者之ヲ筆記シテ責ニ任スヘシ

第一章 與藥

藥劑ヲ與フルニハ命令(處方)ノ時間ト分量トヲ誤ラサルヲ要ス臥シ居ル患者ニ藥劑ヲ内服セシムルニハ起キ上ラシムヘシ起キ上ルコト能ハサル者或ハ之ヲ禁セラレタル者ナルトキハ頭部ヲ稍高クシテ支ヘ嚙下ヲ容易ナラシメ又重症者ニアリテハ藥匙或ハ藥吸吞ヲ用フヘシ

藥劑ヲ與フルニ患者之ヲ拒ムコトアレハ看護者ハ懇切ト熱心トヲ以テ目的ヲ達スヘシ一旦口ニ嚙ミ看護者ノ去ルヲ窺ヒテ吐キ出スモノアリ此ノ場合ニハ服用セシメタル後談話スヘシ又如何ナル場合ニモ暴力ヲ以テ之ヲ服用セシムヘカラス
 味ノ不良ナル藥劑ヲ服用セシメタル後ニハ少量ノ水ヲ與ヘ又ハ含漱セシムヘシ
 水劑ハ沈澱シ又ハ上層ト下層ト成分ヲ異ニスルモノアルカ故ニ

與フル前ニ振盪シ藥盃或ハ藥匙ニ盛リテ服用セシムヘシ但シ沸騰散水ハ振盪スヘカラス

散劑ハ先ツ患者ニ少量ノ湯ヲ含マシメ次ニ藥劑ヲ嚼マセ湯ニテ嚥下セシメ又ハ藥盃若ハ藥匙ニ移シ少量ノ湯ヲ加ヘ搔キ交セテ與フヘシ若器底ニ殘ルトキハ更ニ湯ヲ注キ搔キ交セテ再ヒ之ヲ與フヘシ但シ散劑ハ口内及齒齦ニ附著スルコトアルカ故ニ服用後少量ノ湯ヲ與フヘシ又「キニーネ」ノ如キ惡味ノモノハ「オブラート」ニ包ミ少量ノ湯ニテ嚥下セシムルヲ可トス
丸劑ヲ服用セシムルニハ舌背ノ成ルヘク後方ニ置キ少量ノ湯ニテ嚥下セシムルヲ可トス

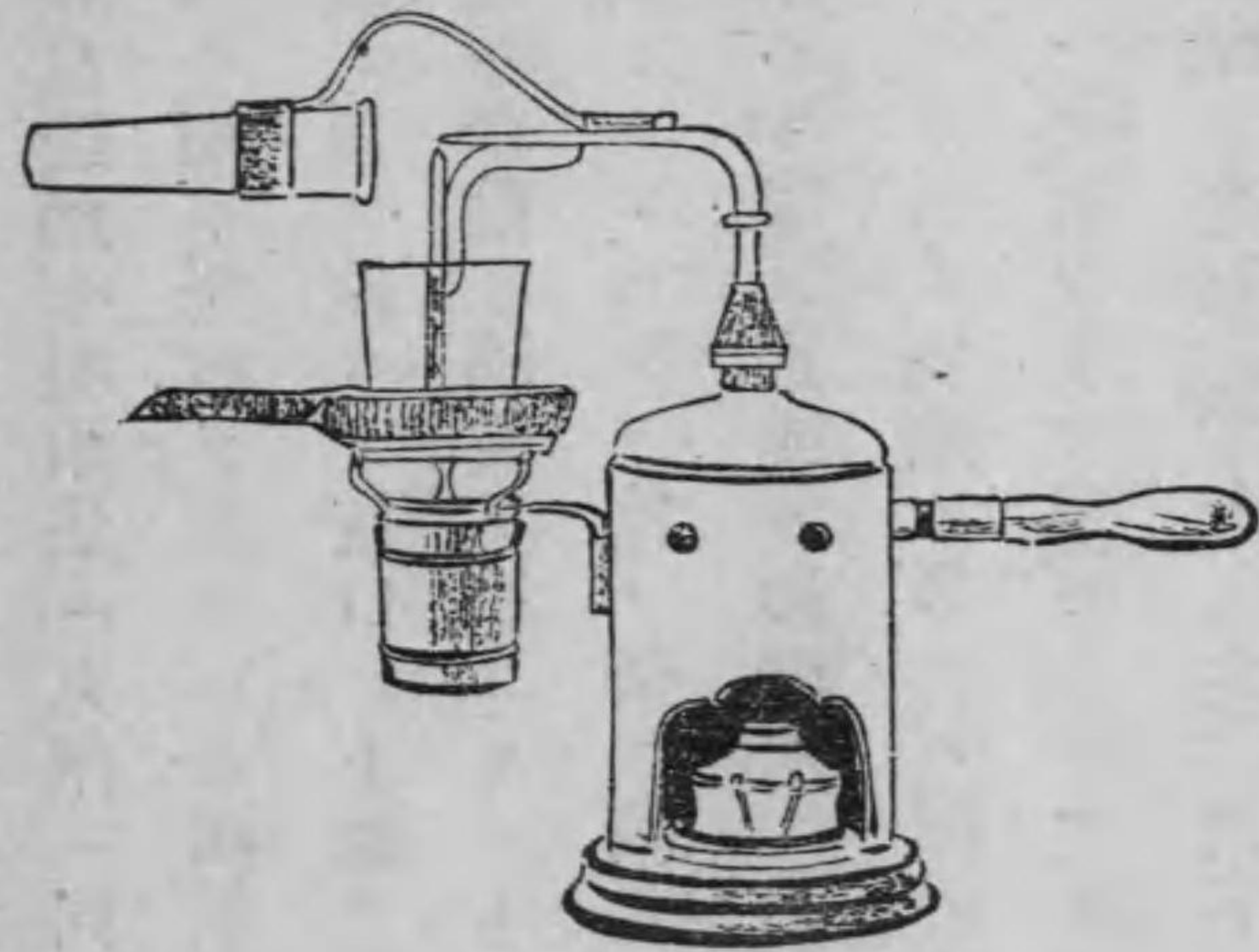
膠囊及錠劑ノ服用法ハ丸劑ニ同シ

滴劑ハ細ニ滴數ヲ算フヘシ滴數ヲ算フルニハ先ツ瓶ヲ傾ケテ栓ヲ濡シ其ノ栓ニテ瓶口ノ下縁ヲ濡スヲ可トス滴瓶ヲ用フルトキハ更ニ精確ニ滴數ヲ算フルコトヲ得若滴數ヲ誤リタルトキハ既ニ滴シタルモノヲ捨テ新ニ滴スヘシ

滴劑ハ少量ノ水或ハ砂糖水ニ滴シテ與ヘ服用後ニハ少量ノ湯ヲ飲マシムヘシ滴劑ハ多クハ揮發性ノモノナレハ滴シテ直ニ服用セシメ又火ヲ引キ易キモノアルヲ以テ注意スヘシ

内服藥ノ容器(例之ハ藥袋)及名票紙(木札)等ニハ服用法ノ記入アリ患者ニ藥劑ヲ與フル毎ニ必ス名票紙ヲ見タル上與フルヲ要

第百四十四圖



第二章 吸入
 吸入トハ藥液ヲ霧或ハ蒸汽ト
 ナシテ吸込ミ呼吸器ノ諸病ニ
 直達ノ効ヲ致サシムルモノヲ
 云フ吸入藥トシテ用フル所ノ
 藥劑ニハ揮發性ノモノト不揮
 發性ノモノトアリ其ノ分量及
 吸入時ノ長短ハ醫員ノ命ニ從
 フヘシ

揮發性ノ藥劑ヲ吸入藥トシテ用フルニハ其ノ二三滴ヲ布片手巾
 或ハ手掌ニ滴シ鼻口ノ前ニ保チテ吸入セシムヘシ
 不揮發性ノ藥劑ヲ吸入藥トシテ用フルニハ多クハ之ヲ水ニ溶シ
 吸入器ニテ霧トナシ患者ノ鼻口ニ向ケテ吸入セシム(第百十四圖)
 吸入器ハ其ノ蒸汽罐ニ二分ノ一又ハ三分ノ二ニ至ルマテ水ヲ盛
 リ(水量多キトキハ爆裂スルコトアリ)沸騰セシメ(速ニ沸騰セ
シメンカタメニ湯ヲ用フルヲ可トス)嘴管ヲ開通シ藥液ノ吸ヒ
 上ケラレテ霧トナルヤヲ試ミ次テ防水性材料ヲ患者ノ被服及臥
 褥ノ上ニ被ヒ又硝酸銀水「タンニン」酸水ノ如キモノヲ用フルト
 キハ皮膚ニ汚斑ヲ生スルコトアルヲ以テ假面ヲ被ラシメ然後

吸入器ヲ適宜ノ處ニ置キ吸入セシムヘシ
吸入器ハ使用後丁寧ニ手入スヘシ手入ヲ怠レハ管口閉塞シ用ヲ
爲ササルコトアリ

温キ蒸汽ヲ吸入セシムルニハ熱湯ヲ盛リタル器ヲ患者ノ鼻口ノ
前ニ保チテ吸入セシメ又ハ漏斗ヲ倒ニナシタルモノ或ハ厚紙ヲ
斜ニ卷キテ喇叭形トナシタルモノヲ以テ此ノ器ヲ蓋ヒ其ノ管端
ヨリ出ル蒸汽ヲ吸入セシムヘシ「テレベンチン」ヲ吸入セシムル
トキノ如キ即チ此ノ法ニ依ル

第三章 點入

點入トハ藥液ヲ結膜囊中或ハ外聽道内ニ點入スルコトニシテ點

眼點耳是レナリ

第一 點眼

點眼スルニハ點眼管ヲ用フ點眼管ハ硝子管ノ一端尖リ他端ニ
「ゴム」帽ヲ附ケタルモノナリ帽ヲ壓シテ管ノ尖端ヲ藥中ニ入レ
壓ヲ去ルトキハ藥液管中ニ上リ此ノ管ノ尖端ヲ外皆ニ近ツケ帽
ヲ壓スルトキハ藥液滴トナリテ出テ眼ニ入ル

點眼スルニハ患者ヲシテ椅子ニ倚リテ頭首ヲ仰カシメ又ハ仰臥
セシメ稍頭首ヲ健側ニ傾ケテ病眼ヲ高クシ看護者ハ左手ノ示指
ニテ靜ニ病眼ノ下瞼ヲ引下ケ眼球ヲ十分ニ上内方ニ向ハシメ右
手ニ點眼管ヲ持チ第四及第五指ヲ患者ノ顳顬又ハ前額ニ當テ藥

液ヲ外皆ニ點入シ脱脂綿紗或ハ脱脂綿ニテ藥液ノ溢レタルヲ拭
フヘシ點眼管ハ眼ト竝行セル位置ニ保ツヲ要ス
「アトロピン」水ヲ點眼スルトキハ内皆ト鼻梁トノ間ヲ壓シ居ル
ヘシ

第二 點 耳

點耳スルニハ點耳管ヲ用フ此ノ管モ亦點眼管ニ同シ之ヲ用フルニ
ハ患者ヲ椅子ニ倚ラシメ頭首ヲ健側ニ傾ケシムルカ或ハ横臥セシ
メ看護者ハ左手ノ第二指ト第三指トニテ耳翼ノ後上部ヲ挟ミテ後
上方ニ引上ケ第四指第五指ヲ頭ニ當テ第一指ニテ耳球ヲ前方ニ排
シ右手ニ持テ耳管ヲ外聽道ノ後上方ニ當テテ藥液ヲ點入シ暫
時ノ後脱脂綿ヲ當テテ頭首ヲ病側ニ傾ケ然ル後綿ニテ栓ヲナスヘ

シ但シ點耳藥液ハ攝氏三十四度内外ノ微温トナスヘシ

第四章 注 射(注入)

注射ヲナス部位ハ口鼻耳肛門尿道龜頭ト包皮トノ間皮下、靜脈
内及筋肉内等ナリ其ノ目的ハ清淨消毒或ハ軟カニシ又ハ治療セ
ントスルニアリ之ニ用フル液ハ微シク温ムルヲ要スルコト多シ
注射ニ用フル器械ハ長短種種ノ嘴管ヲ有スル硝子「ゴム」若ハ金
屬製ノ注射器又ハ硝子角若ハ硬「ゴム」製ノ嘴管ヲ有スル灌水器
ナリ皮下注射ニ用フルハ金屬製小管針ヲ有スル小注射器(皮下
注射器)ナリ

注射ハ注意シテ緩ニスヘシ殊ニ軟カニシテ感覺銳敏ナル處ヲ然

リトス耳ノ注射ニハ殊ニ強壓ヲ加フヘカラス
尿道注射、皮下注射及食鹽水注射ハ左ノ如シ

第一 尿道注射

藥液ヲ尿道ニ注射スルニハ先ツ患者ヲシテ排尿セシメ滅菌水或
ハ硼酸水ニテ度度尿道ヲ洗フヲ要ス洗フ法ハ注射ノ法ニ準ス但
シ其ノ液ハ尿道ニ留マラシムルヲ要セス

注射スルニハ藥液ヲ注射器ニ吸ハセ嘴ヲ上ニ向ケテ空氣ヲ除キ
之ヲ右手ニ持チ患者男子ナレハ左ノ拇指示指及中指ニテ龜頭ヲ
背面ヨリ撮ミ少シク前上方ニ引キ嘴ヲ尿道ニ挿入シ徐カニ注射
シ次テ注射器ヲ拔キ尿道口ヲ壓シ數分時間藥液ヲ尿道ニ留マラ

第百五十圖



シムヘシ注射中看護者ハ患者ノ陰莖ヲ我顔ニ向クヘカラス痲毒
ヲ含メル液逆ニ进出シテ眼ニ入ル虞アレハ
ナリ注射ヲ行ヒタル後ニハ手ヲ洗ヒ消毒ス
ルヲ要ス

第二 皮下注射

皮下注射ハ醫員ノ行フコトナレトモ場合ニ依
リテハ看護者ニ爲サシムルコトアリ之ヲ行フ
ニハ注射スヘキ處ノ皮膚ヲ酒精又ハ「エーテル」
ニテ拭ヒ或ハ其ノ部ニ「ヨード」ヲ塗布シ消
毒シタル注射器ニ藥液ヲ吸ハセ針ヲ上ニ向ケ
吸桿ヲ押シテ管針ノ空氣ヲ除キ右手ニ持チ皮

注射

膚ヲ左ノ示指ト拇指トニテ撮ミ上ケ皺襞ヲ生セシメ皺襞ノ下ヲ斜ニ刺シ徐ニ藥液ヲ注射シ刺口ノ周圍ヲ指ニテ押ヘ針ヲ抜キ刺口ニ絆創膏ヲ貼リ暫時其ノ部ヲ摩擦シテ藥液ヲ擴カラシムヘシ(第一百十五圖)

皮下注射器ノ針ハ乾カシ金屬線ヲ通シ置クヘシ

第三 食鹽水注射

食鹽水注射ハ外傷分娩又ハ手術等ニテ一時ニ多量ノ血液ヲ失ヒタル者或ハ甚シキ衰弱患者等ニ施ス方法ニシテ醫員之ヲ行フ注射ニ用フル食鹽水ハ通常〇・六乃至〇・九%ノ滅菌食鹽水ニシテ之ヲ食鹽水注射器ニ充シ體溫度ニ溫メ適宜ノ高サニ擧ケ徐ニ大腿內側又ハ其ノ他ノ皮下ニ注射ス注射部ハ豫メ充分ニ消毒ス

ルヲ要ス

注射液ノ量ハ病症ノ緩急ニ應シ一樣ナラス通常一回五〇〇・〇乃至一〇〇〇・〇ccニシテ十分乃至三十分間ニ注入シ終ルモノトス

第五章 尿道「カテーテル」送入

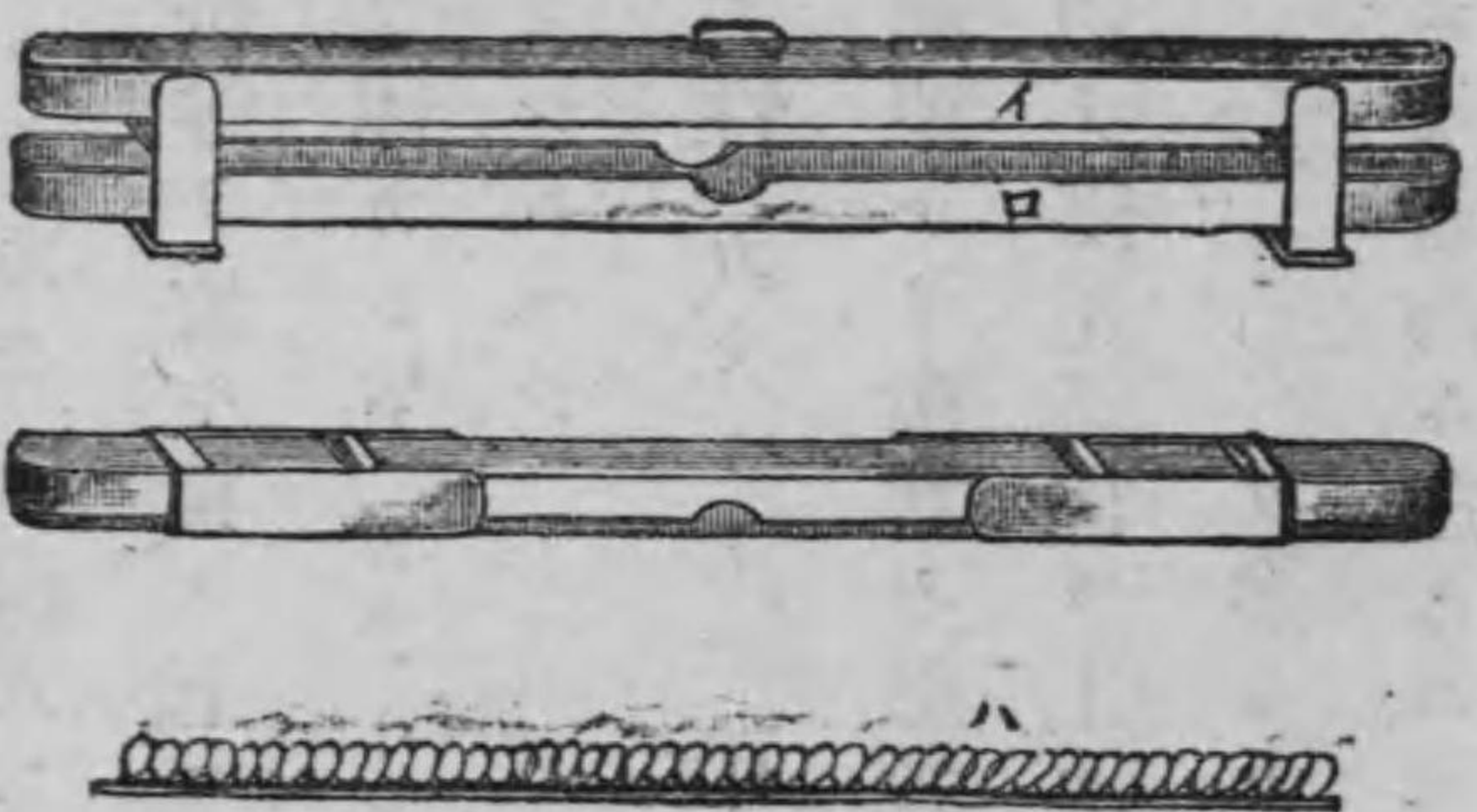
尿道「カテーテル」ハ金屬製ト彈力性ノモノトアリ排尿又ハ膀胱洗滌ノ爲ニ尿道ヨリ膀胱内ニ送入スルモノナリ

「カテーテル」ハ使用前嚴ニ消毒スルヲ要ス若消毒不十分ナルトキハ尿道及膀胱ノ炎症ヲ起シ易シ其ノ消毒ハ蒸汽煮沸又ハ藥液ニ依ル藥液ニテハ「カテーテル」ノ外面ノミナラス管腔内ヲモ十

分ニ消毒スヘシ即チ五〇％石炭酸水一〇％「リゾール」水又ハ
 ○・一％昇汞水金屬「カテーテル」ハ昇汞水ヲ用フヘカラスヲ以テシ次テ微温ノ滅菌水又ハ硼
 酸水ニテ洗ヒ滅菌綿紗ニテ拭フヘシ「カテーテル」ハ略ホ體溫度
 ニ温メテ使用スルヲ可トス

「カテーテル」ノ煮沸消毒法中最輕便ナルハデシヤストレット氏
 消毒器(第百十六圖)ニシテ「ネラトン」式「カテーテル」ノ消毒ニ
 ハ上箱ニ温湯八〇〇ccヲ容レ螺旋管ニ「カテーテル」ヲ挿入シテ
 之ヲ納メ蓋ヲ爲シ下箱ニ酒精二〇〇ccヲ容レ又金屬性「カテー
 テル」ニテハ上箱ニ温湯二〇〇cc下箱ニ酒精四〇〇乃至五〇
 〇ccヲ容レ點火スヘシ酒精燃エ盡クルトキハ消毒セラレタルモ

第百十六圖



イ 上箱
 ロ 下箱
 ハ 螺旋管
 ヒ又「カテーテル」ニ塗布スル「オ
 レーフ」油「ワセリン」等モ亦消毒
 シタルモノナルヲ要ス

ノトス
 又術者ハ手ヲ消毒シ患者ノ尿道
 口及其ノ周圍ハ藥液濕布ニテ拭
 ハ脆弱トナリ使用ノ際破折シテ
 膀胱又ハ尿道内ニ遺留スルコト

アルヲ以テ使用前能ク検査スヘシ

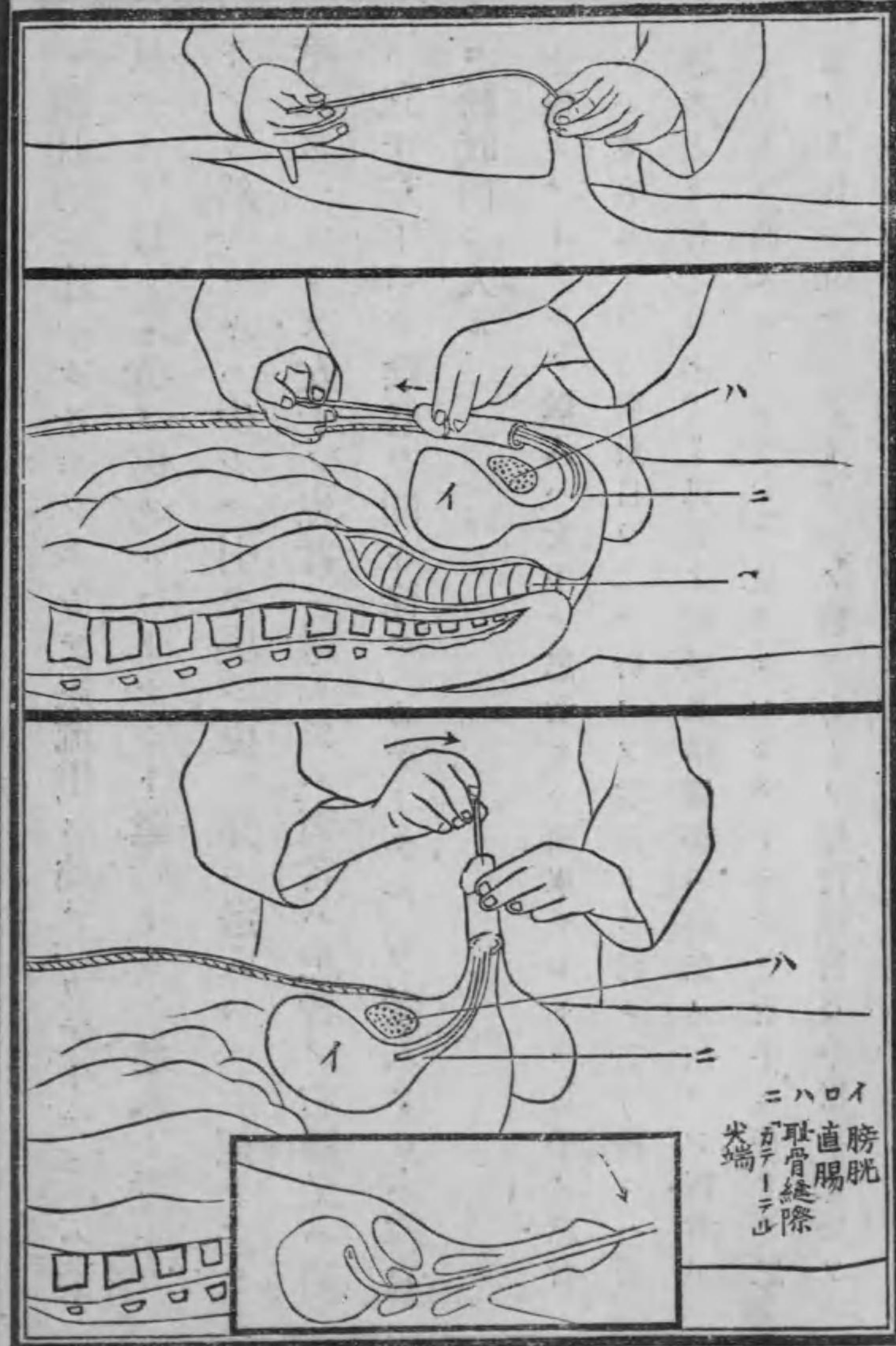
尿道「カテーテル」送入

使用後ノ「カテーテル」ハ清洗シ消毒シタル後清潔ニ保存スヘシ
 「カテーテル」ヲ送入スルニハ患者ヲ仰臥セシメ臀ノ下ニ防水布
 油紙等ヲ敷キ其ノ下ニ小枕ヲ置テ腰ヲ少シク高クシ膝ヲ屈シテ
 股ヲ開カシム「カテーテル」送入ノ間ハ患者ニ口ヲ開キテ靜ニ呼
 吸セシムヘシ

弾力性「カテーテル」中「ネラトン」式「カテーテル」ノ使用法ハ操
 作簡單ナリ術者ハ患者ノ左側ニ立チ男子ノ患者ニハ術者ノ左手
 ヲ以テ陰莖ヲ握リ上ニ向ハシメテ牽引シ尖端ニ「オレーフ」油又
 ハ「ワゼリン」ヲ塗リタル「カテーテル」ヲ筆ヲ執ルカ如クニ持チ
 徐ニ尿道内ニ送入スヘシ「カテーテル」ノ約三分二以上入ルトキ

ハ膀胱内ニ達シタルモノニシテ尿流出ス此ノ「カテーテル」ハ柔
 軟ナルヲ以テ尿道ヲ傷クルコトナシト雖時トシテ進入シ難キコ
 トアリ然ルトキハ少シク引キ戻シ更ニ徐ニ送入スヘシ強テ之ヲ
 壓入スヘカラス女子ノ患者ニ對シテハ術者ハ患者ノ右側又ハ前
 ニ立チ左手ニテ陰唇ヲ開キ徐ニ「カテーテル」ヲ送入スレハ容易
 ニ膀胱内ニ入ル

金屬「カテーテル」ノ送入ハ女子ノ患者ニハ簡單ナレトモ男子ノ患者
 ニハ屢容易ナラス醫員自ラ之ヲ行フヲ常則トス然レトモ稀ニハ看
 護者之ヲ行フコトアリ患者ノ位置及準備等ハ前記ノ如クシ術者ハ
 「オレーフ」油又ハ「ワゼリン」ヲ塗リタル「カテーテル」ヲ右手ニ持チ患
 者ノ左側ニ立チ「カテーテル」ノ柄ヲ右手ノ拇指示指及中指ニテ筆ヲ



執ルカ如クニシ小指ヲ以テ患者ノ腹壁ニ支ヘ左手ノ拇指示指及中指ニテ陰莖ヲ撮ミカテーテルノ尖端ヲ尿道口ニ入レ徐ニ之ヲ送入スルト共ニ左手ニテ陰莖ヲ上方ニ押舉クル如クニシカテーテルノ尖端恥骨縫際下ニ達セハ其ノ柄ヲ擡ケテ殆ント鉛直トシ次テ股間ニ向テ壓下スヘシ著シキ抵抗ナクシテ之ヲ水平ノ位置ニ壓下シ得タルトキハ其ノ尖端膀胱内ニ達セルモノニシテ尿流出スカテーテルヲ送入中抵抗アルトキハ少シク之ヲ引キ戻シ更ニ送入ヲ試ムヘシ決シテ力ヲ加ヘテ押入ルヘカラス(第百十七圖)

女子ノ患者ニ在テハ術者ハ其ノ右側又ハ前ニ立チ左手ニ陰唇ヲ開キ靜ニカテーテルヲ送入スヘシ

第六章 膀胱洗滌

膀胱ヲ洗滌スルニ普通ノ金屬カテーテルヲ以テスル法ト復道カテ

「テ」ヲ以テスル法トアリ甲ハ「カ」テ「テ」ヲ膀胱内ニ送入シタル後其ノ柄ニ漏斗及壓定子ヲ附シタル長サ約一米ノ「ゴ」ム管ヲ連結シ其ノ漏斗ニ洗滌液微温トナシタル滅菌水硼酸水「サ」リチ「ル」酸水過「マ」ンガ「ン」酸「カ」リウ「ム」水等ヲ容レ之ヲ舉ルトキハ其ノ液ハ膀胱内ニ流入シ之ヲ低クスルトキハ流出スルヲ以テ兩三回反覆シ流出液ノ清澄トナルニ至リテ止ム時トシテ疼痛ヲ發スルコトアルヲ以テ洗滌ヲ中止スルコトアリ

復道「カ」テ「テ」ヲ以テ膀胱ヲ洗滌スルニハ輸入管口ニ長サ約一米ノ「ゴ」ム管ヲ連結シ其ノ他端ニ灌水器ヲ附ス而シテ輸出管口ニハ單ニ「ゴ」ム管ヲ連結ス兩「ゴ」ム管共ニ壓定子ヲ附スヘシ今先ツ輸出管口ノ「ゴ」ム管ヲ閉チ灌水器ニ洗滌液ヲ盛リテ舉ク然ルトキハ其ノ液ハ膀胱内ニ流入スルヲ以テ此ノ「ゴ」ム管ヲ閉チ輸出管口ノ「ゴ」ム管ヲ開

テ之ヲ排出セシムヘシ或ハ又此ノ如ク洗滌液ヲ各別ニ出入セシムルコトナク斷ニス持續シテ洗滌スルコトアリ其ノ法ハ兩「ゴ」ム管ノ壓定子ヲ同時ニ開キ漏斗ヨリ洗滌液ヲ流入スレハ他方ヨリ流出シ液ハ絶ニス膀胱内ヲ通過スルモノナリ
大人ノ膀胱容量ハ約三〇〇〇ナルヲ以テ洗滌ノ際膀胱内ニ注入スル液量ハ之ヲ超ユヘカラス

第七章 灌腸及注腸

灌腸トハ灌腸器ヲ用ヒ注腸トハ灌水器ヲ用ヒテ肛門ヨリ藥液ヲ送ルヲ云フ

催下灌腸ニハ水或ハ之ニ少量ノ食鹽石鹼「オ」レ「フ」油蓖麻子油等ヲ加ヘタルモノ若ハ「グ」リ「セ」リン「」ヲ用フ共ニ微温ナルヲ要ス

「グリセリン」ヲ用フルトキハ「グリセリン」灌腸器ニテ爲スヲ例トス

止痢灌腸ニハ澱粉液亞麻仁煎汁燕麥煎汁等ヲ用フ其量ハ六〇・

〇乃至一〇〇・〇ccヲ超ユヘカラス且微温ナルヲ要ス

滋養灌腸ニハ肉汁卵黄乳汁等ヲ微温ニナシテ用フ之ヲ行フニハ豫メ微温湯ニテ直腸ヲ洗滌スルヲ要ス

灌腸ハ多量ノ藥液ヲ深ク腸ノ上部ニ送ルモノニシテ灌水器ノ導水管ハ長サ約一・五米ナルヲ要ス又此ノ法ハ灌腸及洗腸ニ代用セラル

灌腸及注腸液ヲ温ムルトキハ其ノ温度攝氏二十五度ヲ超ユヘカ

ラス液中ニ手指ヲ入レ冷カナラス熱カラサルヲ適度トス

灌腸及注腸ヲナスニハ臥褥ノ上ニ防水性材料ヲ敷キ患者ヲ臥褥ノ縁ニ横臥セシメ(左側臥ヲ可トス)臀ヲ少シク寢臺ノ外ニ出シ明ルキ方ニ向ケシムヘシ重症者ハ仰臥セル儘兩脚ヲ開キ膝ヲ曲ケ臀ノ下ニ差込便器ヲ入レ僅ニ肛門ヲ高クシ看護者ハ寢臺ノ側ニ蹲リ左ノ拇指ト示指トヲ以テ臀ヲ開キ右手ニ灌腸器或ハ灌水器(藥液ヲ充シ空氣ヲ除クタメ嘴管ヨリ二三滴ノ液ヲ出シ嘴ニ油ヲ塗リタルモノ)ヲ持チ嘴ヲ徐ニ肛門内ニ挿シ入ルヘシ肛門ノ感覺鋭敏ニシテ痙攣様ニ縮ムトキハ油ヲ多ク塗リ置キ嘴ヲ廻シツツ徐ニ挿シ入ルヘシ嘴ハ斜ニ後上方ニ向フヲ要ス嘴ノ肛門

ニ入ルコト約五乃至六糎ニシテ足ル灌腸器ヲ用ヒタルトキハ「ゴム」球ヲ壓シ或ハ弛メ灌水器ニアリテハ他ノ看護者之ヲ一米許リ高ク捧ケ「ゴム」管ヲ撮ミ嘴ノ十分ニ入りタルトキ「ゴム」管ヲ放開セハ液ハ自ラ腸内ニ入ル捧クルコト愈高ケレハ入ルコト愈速ニシテ〇・五乃至一〇立ノ液ヲ入ルルコト容易ナリ但シ液ヲ入ルルトキ患者疼痛ヲ訴フレハ一時「ゴム」管ヲ撮ミ液ノ流下ヲ遮ルヘシ決シテ器ヲ下クヘカラス

灌腸及注腸液ハ成ルヘク永ク腸内ニ留マラシムヘシ

第八章 食道「カテーテル」送入

食道「カテーテル」胃管「カテーテル」ヲ送入スルニハ患者ヲ椅子ニ凭ラシメ時トシテ仰臥ノ位置ニ於テスルコトアリ頸部以下ニ防水布ヲ

第百十八圖



纏ヒ頭首ヲ常位ニ保チ或ハ僅ニ後屈シテ十分ニ口ヲ開キ靜ニ呼吸セシメ術者ハ其ノ前ニ立チ左ノ示指ト中指トヲ舌根ニ送りテ之ヲ導子トナシ右ノ手ニ「カテーテル」ノ末端ヲ筆ヲ執ルカ如クニ持チ徐ニ之ヲ送入スヘシ其ノ尖端環狀軟骨ノ部ニ至レハ突キ當リテ抵抗ヲ覺ユルコトアルヲ以テ此ノ時ニハ少シク引キ戻シテ再ヒ送入シ且徐ニ嚥下運動ヲナサシムルトキハ容易ニ胃中ニ達スルヲ得ヘシ(第百十八圖「カテーテル」ハ通例「ネラトン」式ノモノ

ヲ用ヒ用ニ臨ミ温湯ニ浸シ濕リタル儘之ヲ送入シ特ニ油類ヲ塗ル
ヲ要セス始テノ患者ニ在リテハ豫メ二〇%ノ「コカイン」水ヲ咽頭ニ
塗布シテ「カテーテル」ヲ用フルヲ良トス

第九章 胃洗滌

胃ヲ洗滌スルニハ先ツ患者ニ食道「カテーテル」ヲ送入シ硝子製ノ漏
斗ヲ附シタル長サ一米餘ノ「ゴム」管ヲ連結シ漏斗内ニ洗滌液ヲ盛リ
テ舉上スヘシ然ルトキハ其ノ液自然ニ流入シテ胃中ニ達シ漏斗ヲ
低下スレバ液流出ス之ヲ兩三回反覆シテ流出液ノ清澄トナルニ至
リテ止ム若洗滌液中ニ血液ヲ混スルカ又ハ他ノ障礙アルトキハ直
ニ中止スルヲ要ス
漏斗ノ舉上ハ高キニ過クヘカラス水勢劇シク胃ヲ刺戟スルヲ以テ
ナリ通例患者ノ口鼻ト同等ノ高サナルヲ適當トス

胃ヲ洗滌スルニハ通例空腹時(早朝又ハ臨臥時)ニ行ヒ(毒物嚥下又ハ
手術準備ノ際)ハ此ノ限ニアラス(其ノ洗滌液ハ通例微温ノ滅菌水ヲ
用フ

第十章 胃液採取

胃液ヲ採取スルニハ早朝空腹時ニ患者ニ麵麩ノ一片(約半斤ノ三分
一)ヲ與ヘ十分ニ咀嚼シテ嚥下セシメ同時ニ微温湯二〇〇〇瓦ヲ飲
マシメタル後約一時間ヲ經テ食道「カテーテル」ヲ送入シ胃液ヲ採取
スヘシ之ヲ採取スルニハ「カテーテル」口ヨリ吐出セシムルヲ輕便ナ
リトスレトモ吐出シ難キトキハ「食管」ヲ有スル小「ゴム」球ヲ壓縮シテ
「カテーテル」口ニ挿入シ壓ヲ去レハ胃液ハ其ノ球内ニ返流スルヲ以
テ兩三回反覆シ採取シタル液ニハ月日及患者ノ氏名ヲ記シタル札
ヲ附シテ試験室ニ送ルヘシ

第十一章 塗 擦

皮膚ニ擦リ込ム(塗擦)藥劑ニハ軟膏劑油劑酒精劑及水劑アリ塗擦スル流動體ハ其ノ瓶ヲ湯ニ漬シ適宜ニ溫メテ用フルヲ例トス酒精劑ハ火ヲ引キ易キヲ以テ注意スヘシ

塗擦スルニハ先ツ其ノ部ヲ微溫湯ニテ洗ヒタル後十分ニ乾カシムヘシ或ハ酒精又ハ「エーテル」ニテ清ムヘシ塗擦ニハ裸手ヲ以テシ或ハ綿紗綿球「フランネル」或ハ場合ニ依リ革膀胱等ニ綿ヲ包ミ球狀トナシタルモノヲ用ヒテ行フコトアリ

塗擦スルニハ患者ノ疼痛ヲ覺エサル様適宜ニ壓シ靜ニ輪狀ニ擦ルヘシ水劑及酒精劑ハ皮膚ノ全ク乾クマテ油劑及軟膏劑ハ皮膚

ニ微カニ其ノ跡ヲ見ルマテ擦ルヘシ

軟膏劑或ハ油劑ヲ塗擦シタル後ニハ其ノ部ニ布或ハ綿ヲ置キ防水性材料ニテ被ヒ繃帶スヘシ

塗擦前ニハ看護者ハ手ヲ洗ヒ適宜ニ溫メ塗擦後ニモ亦手ヲ洗ヒ藥氣ヲ去ルヘシ

塗擦療法中最モ必要ナルハ梅毒患者ニ行フ所ノ水銀軟膏塗擦法ナリ之ヲ行フニハ先ツ患者ニ入浴セシメ一定量(一回量ニ乃至四瓦)ノ軟膏ヲ採リ六日間連續シテ全身ニ塗擦スヘシ其ノ法第一日ニハ左上膊及前膊ノ前面第二日ニハ右上膊及前膊ノ前面第三日ニハ胸部(乳頭ヲ避ク)第四日ニハ腹部(臍ヲ避ク)第五日ニ

ハ左内股及腓腸部（女子ハ内股ヲ出スヲ嫌フカ故ニ腓腸部ノミ
ニテ可ナリ）第六日ニハ右内股及腓腸部ニ塗擦ス之ヲ第一回ノ
塗擦トス第七日ニハ塗擦ヲ休止シテ入浴セシメ第八日ニ至リ再
ヒ入浴ヲナサシメ更ニ第一回ト同一ノ方法ニ依リ第二回ノ塗擦
ヲ行ヒ反覆塗擦シテ第四回ニ及フトキハ第一週回ノ塗擦ヲ終ル
モノトス第二週回ノ塗擦ヲ要スルトキハ爾後一乃至二週日間ヲ
經テ始ムルヲ要ス

塗擦ハ可及的患者自身ニ行ハシムルヲ可トス是レ其ノ一部ハ塗
擦者ノ指掌ヨリ吸收スルモノナレハナリ而シテ夜間臨臥ノ時之
ヲ行ヒ塗擦シタル部ハ厚ク被包スルコトナク綿紗ノ一層ヲ以テ

被ヒ褥中ニ在リテハ毛布ヲ面部ヨリ被フヲ可トス溫暖ノ爲ニ塗
擦部ヨリ蒸發スル水銀蒸氣ヲ吸入セシメンカ爲ナリ若塗擦部發
赤シテ灼熱痛感等ヲ發シ又ハ皮疹ヲ生シタルトキハ之ヲ中止シ
又流涎齒齦ノ腫起等汞毒性口内炎ヲ起サントスルトキハ醋酸礬
土水若ハ鹽剝水ヲ以テ屢含漱セシムヘシ

第十二章 塗布

皮膚或ハ粘膜ニ藥劑ヲ塗ルニハ毛筆若ハ綿球ヲ附ケタル捲綿子
ヲ用フ

塗布スヘキ處ハ皮膚咽頭齒齦鼻腔眼結膜等ニシテ塗布劑ハ「ヨ
ード」丁幾樟腦精硝酸銀水「コロヂウム」等ナリ「コロヂウム」ハ

揮發シ又火ヲ引キ易キモノナレハ硝子瓶ニ密栓シテ貯ヘ火ニ近ツクヘカラス

塗布スルニハ一度ニ塗布スヘキ量ヲ分チ取り之ニ毛筆或ハ捲綿子ノ綿球ヲ漬シテ塗ルヘシ此ノ際衣服又ハ必要ナキ所ニ附カサル様注意スヘシ

毛筆及捲綿子ハ用ヒタル後先ツ曹達液ニテ次ニ三・〇%石炭酸水ニテ更ニ滅菌水ニテ洗ヒ清ムヘシ但シ捲綿子ノ綿球ハ毎回之ヲ棄テ傳染病者(殊ニ實扶的里患者)ニ用ヒタル毛筆ハ燒キ棄ツヘシ

第十三章 含漱

含漱トハ常水若ハ藥液ヲ含ミテ齒齦舌口蓋咽頭等ヲ洗フコトニシテ消毒收斂若ハ單ニ清潔等ノ目的ニテ行フモノナリ含漱セシムルニハ患者ヲシテ含漱藥ノ適量ヲ含マシメ頭首ヲ仰ムケ呼氣ヲ營マシムヘシ然ルトキハ藥液咽喉内ニテ振り動カサレ十分其ノ目的ヲ達スルコトヲ得而シテ其ノ藥液ヲ出サシメ更ニ三四回反覆セシムヘシ人事不省ニ陥リシ者又小兒等ニアリテハ此ノ法ヲ行フコト能ハス故ニ水或ハ含漱劑ヲ綿紗ニ浸シテ口腔内ヲ拭フヘシ

第十四章 撒布

撒布トハ皮膚粘膜或ハ創面等ニ藥劑ヲ撒布スルコトナリ

創面ナキ皮膚ニ撒布スルニハ藥劑ヲ毛筆或ハ綿球ニ含マセテ撒布スルカ或ハ綿紗ニ包ミテ輕ク打チ或ハ輕ク擦ルヘシ又創面ニ撒布スルニハ藥劑ヲ含マセタル滅菌綿球ヲ鑷子ニ挟ミ其ノ鑷子ヲ拇指ト中指トニテ撮ミ示指ヲ以テ輕ク鑷子ヲ彈クトキハ藥劑ヲ能ク意ノ如ク撒布セシムルコトヲ得ヘシ鼻腔咽頭喉頭等ニハ吹粉器ト稱スル特別ノ器械ヲ使用ス

第十五章 芥子泥

芥子泥ヲ製スルニハ新シキ芥子末ニ少量ノ溫湯ヲ注キ搔キ交セテ固キ泥トナシ綿布綿紗脫脂紋巴或ハ日本紙ニ厚サ一分位ニ延ヘ其ノ面ヲ日本紙ニテ被フヘシ大サト貼スヘキ處トハ醫員之ヲ

命ス

擦リタル山葵又ハ芥子精ヲ芥子泥ニ代用スルコトアリ此ノ時芥子精ハ日本紙等ニ吸收セシメテ用フヘシ

貼スヘキ處ノ皮膚感覺鈍キトキハ布ニテ擦リタル後貼スヘシ坐臥ニ物ニ觸レテ壓セラルル處ニ貼スヘカラス又臍及乳房ヲ避クヘシ屢貼スルトキハ毎回其ノ處ヲ換フルヲ例トス

芥子泥ハ強キ疼痛ヲ覺ユルマテ貼シ置クヘシ但シ強キ疼痛ヲ覺ユルハ體ノ部位ニ從ヒ遲速アルモ大抵十乃至十五分時間ナリ

芥子泥ヲ剝キタル後ハ其ノ處ヲ微溫湯ニテ洗フヘシ芥子泥ノ刺戟強クシテ水疱ヲ生スルコトアルトキハ少量ノ「オレーフ」油或

ハ硼酸軟膏ヲ塗リ繃帶スヘシ又疼痛劇シキトキハ硼酸水等ニ濡シタル綿紗ニテ被フヘシ

第十六章 發泡膏

皮膚ニ水疱ヲ發セシムル膏藥ハ發泡膏〔カンタリス〕膏ナリ此ノ膏藥ハ名刺ノ厚サ位ニ布或ハ紙ニ延ヘタルモノ(發泡紙)ヲ貼シ絆創膏或ハ繃帶ニテ固定ス又稍大ナル絆創膏ノ縁ヲ殘シテ其ノ中部ニ此ノ膏藥ヲ延ヘテ貼スルモ可ナリ其ノ大サ及貼スヘキ部位ハ醫員之ヲ命ス
水疱ハ膏藥ヲ貼シタル後十乃至十二時間ニシテ生ス既ニ生シタルトキハ膏藥ヲ剝キ消毒シタル刀尖或ハ針ニテ疱膜ヲ刺シ流出スル液ヲ脫脂綿ニ吸ハセ次ニ硼酸軟膏ヲ塗リタル綿紗ニテ被フヘシ水

疱ノ表皮ヲ剝クヘカラス

發泡液ハ屢血清ニ代ヘテ腸窒扶斯虎列刺等傳染病ノ血清診斷用ニ供セラル此ノ場合ニハ丁寧ニ疱液ヲ滅菌セル試驗管ニ採取スルモノトス

第十七章 冷罨法

冷罨法トハ身體ノ一部ヲ冷ヤシテ炎症ヲ防キ又疼痛ヲ去ル等ニ用フルモノニシテ冷水罨法ト氷罨法トアリ

冷水罨法ハ布ヲ水ニ浸シ輕ク絞リテ四層乃至八層ニ疊ミ其ノ大サヲ患部ヨリ稍大ナラシメテ貼ス冷水罨法ヲ行フトキハ別ニ同シキ大サノ布ヲ水ニ浸シ置キ約五分時毎ニ取り換フヘシ水モ亦

時時取り換フルヲ要ス

夏ハ要スレハ水ニ食鹽ヲ加ヘ或ハ氷片ヲ混シテ冷ナラシムルコトヲ得

氷罨法ハ布ヲ數層ニ疊ミテ氷ノ上ニ置キ冷ユルヲ俟チテ貼シ度度取り換フヘシ又氷ヲ氷嚢ニ入レテ貼スルコトアリ又頭ニハ氷枕ヲ用フルコトアリ
氷ヲ氷嚢ニ入ルルニハ之ヲ胡桃大ニ碎キ嚢ノ半マテ入レ成ルヘク空氣ヲ除キ口ヲ緊ムルヲ要ス之ヲ貼スルニハ患部ニ乾キタル布ヲ被ヒ其ノ上ニスヘシ患部ヲ壓スヘカラス
氷嚢ノ壓スルコト及滑ルコトヲ防クニハ嚢ニ紐ヲ附シ氷嚢吊袋

避等ニ結ヒ垂ルルヲ可トス

氷罨法ヲ用フルコト永キニ互ルトキハ局部ニ凍傷ヲ生スルコトアリ注意スヘシ

氷枕ハ「ゴム」製ノ嚢ニシテ用法ハ氷嚢ニ準ス

第十八章 濕罨法

濕罨法（ブリースニツツ氏罨法）トハ濕布ヲ以テ身體ノ一部ヲ被ヒ體溫ニテ溫マラシムルヲ云フ

濕布ハ適當ナル大サノ布ヲ數層ニ疊ミ室溫ノ水或ハ藥液ニ浸シ液ノ滴ラサル程ニ絞リテ貼ス而シテ其ノ上ヲ此ヨリモ二三指ノ幅タケ大ナル防水性材料ニテ被ヒ更ニ幅廣キ布或ハ繃帶ニテ固

定ス

潰瘍或ハ口ヲ開キタル創傷等アルトキハ其ノ上ニ弱キ消毒液ニ浸シタル綿紗ヲ被ヒタル後此ノ罨法ヲ施スヘシ

濕罨法ヲ繼續スヘキ期間ハ醫員之ヲ命ス其ノ間毎日一回或ハ數回取り換フルヲ例トス又之ヲ要セサルニ至ルトキハ拭ヒタル後乾キタル布ニテ包ムヘシ

第十九章 溫罨法

溫罨法トハ身體ノ一部ヲ溫メ病勢ヲ緩メ或ハ吸收ヲ促シ或ハ化膿ヲ進ムル等ニ用フルモノニシテ濕性溫罨法ト乾性溫罨法トアリ

濕性溫罨法トハ溫湯或ハ溫キ藥物ノ煎汁若ハ浸汁ニ綿紗或ハ「フランネル」等ヲ浸シ適宜ニ絞リテ貼スルヲ云フ

此ノ法ハ温度高キニ過キサルヲ要ス火傷ヲ起ス虞アレハナリ又冷ニ過クルモ不可ナリ度々取換ヘ又防水性材料ニテ其ノ上ヲ被フヘシ溫ヲ保チ兼テ被服ヲ汚ササルヲ以テナリ

巴布ハ大麥燕麥亞麻仁藥草等ノ粗末ヲ水ニテ搗キ雜セ煮テ稍硬キ粥狀トナシタルモノ又ハ溫キ米飯ヲ布ニ包ミ一指幅ノ厚サトシ若ハ蒟蒻コンニヤクヲ水煮ニシ布ニテ包ミタルモノナリ貼スルトキハ自己ノ頬ニ當テテ温度ヲ試ムルヲ要ス巴布ハ病室外ニテ製スヘシ腐敗セサル間ハ幾度モ煮テ用フルコトヲ得

乾性溫罨法ハ一局部ニ効ヲ致サシムルアリ或ハ全身ニ効ヲ及ホ
サシムルアリ而シテ之ヲ施スニハ溫石懷爐オンシヤク或ハ湯婆ユタンボ(陶製鑊硝
子鑊等ニ熱湯或ハ熱砂ヲ盛リタルモノ)等ヲ布或ハ綿ニ包ミテ
用フ鑊ハ栓ヲ密ニシ紐ニテ固ク縛ルヲ要ス

第二十章 吸角及鬱血療法

通常ノ吸角ヲ貼スルニハ之ヲ清メ要スレハ消毒シタル後其ノ底
ニ少許ノ綿ヲ入レ又ハ
數滴ノ酒精或ハ「エー
テル」ヲ注キ振り動カ
シテ剩レル液ヲ傾ケ去

第一百十九圖



リ乾キタル布ニテ吸角ノ縁ヲ拭ヒ乾カシ火ヲ點シテ手早ク貼ス
ヘシ(第一百十九圖)

吸角ヲ貼スルトキハ其ノ部ヲ清淨ニシ要スレハ消毒スヘシ
鬱血療法ヲ行フニハ吸角ヲ十分ニ清メ消毒シテ貼シ次テ吸吮装置
ヲ裝ヒ吸角ノ空氣ヲ除キ外氣ノ壓ニ依リテ吸角ヲ吸著セシムヘシ
但シ患部ニハ脂肪ヲ塗ルヲ可トス又吸角ヲ除クニハ其ノ中ニ空氣
ヲ送り外氣ノ壓ト平均セシメ自然ニ落チシムヘシ
鬱血療法ニ用フル吸角ノ種類及時間強弱ハ醫員之ヲ命ス

第二十一章 水蛭

水蛭ハ一二時間水外ニ出シ置クトキハ血液ヲ吸フコト多シ又用
フル前、醋或ハ麥酒ト水トノ混和液ノ中ニ暫ク放チ置クモ可ナ

水蛭ノ數及之ヲ貼スル部位ハ醫員之ヲ命ス其ノ貼スル部位ハ成
ルヘク毛ヲ剃リ清ムヘシ若吸ヒ著カサルトキハ皮膚ニ少量ノ牛

乳砂糖水或ハ患者ノ血液（他人ノ血ヲ用フ
ヘカラス）ヲ塗ルヘシ

貼スルニハ布ニテ水蛭ノ後身ヲ包ミテ撮ミ
口ヲ皮膚ニ接スヘシ又試験管（第二百一十圖）
或ハ卷キタル厚紙ノ管ニ入レテ貼スルモ可
ナリ一處ニ多ク貼スルニハ水蛭ヲ日本紙ニ
載セ又ハ小瓶若ハ小サキ硝子蓋ニ入レ其ノ



第 百 二 十 二 圖

部ヲ蓋ヒ置クヘシ

水蛭ハ飽ケハ自ラ落ツルカ故ニ強テ除クヘカラス若飽ク前ニ除
クヲ要スルトキハ蟲體ニ少量ノ食鹽ヲ撒布スヘシ
出血止ムトキハ拭ヒ消毒綿紗ヲ貼シ乾キタル繃帶ニテ被フヘシ
水蛭落チタル跡ヨリ出血止マサルトキハ石炭酸水ニ浸シタル布
ニテ壓迫シ猶止マサレハ醫員ニ報スヘシ
用ヒタル水蛭ハ食鹽ヲ撒布スル等ニ依リ殺スヘシ

第 二 十 二 章 浴

第 一 水 浴

水浴ハ其ノ溫度ニ依リテ左ノ區別アリ

浴

一、冷浴 攝氏十乃至二十度

二、半冷浴 同 三十度迄

三、微溫浴 同 四十度迄

四、溫浴 同 四十五度迄

五、熱浴 同 四十五度以上

以上ノ溫度ハ醫員之ヲ命ス看護者ハ每浴之ヲ測ルヘシ

浴水ニ藥物ヲ加フルコトアリ食鹽石鹼糠芥子末及草根木皮ノ類
是レナリ但シ糠芥子末及草根木皮ハ布囊ニ入レ鍋ニテ煮テ煮汁
ヲ取り汁ヲ浴水ニ加ヘ囊モ共ニ浴水ニ入レ置クヘシ
水浴ニハ全身浴局所浴灌水浴及射浴ノ別アリ

一、全身浴ハ患者自ラ浴室ニ往キテ浴槽ニ入ルヲ例トス

花柳病疥癬「トラホーム」腸窒扶斯回復期ノ患者及其ノ他ノ傳染
病患者ニ用フル浴槽或ハ浴盤ハ他ノ患者ニ用フヘカラス若已ム
ヲ得サレハ消毒スルヲ要ス

衰弱セル患者ハ看護者扶ケテ浴室ニ導キ或ハ運搬シ靜ニ浴盤ニ
入レ入浴中其ノ身體ヲ支フヘシ又重症者及甚シク衰弱セルモノ
ノ爲ニハ浴盤ヲ病室ニ運ヒテ入浴セシムルコトアリ
浴盤ノ水ハ患者ノ肩ニ至ルヲ度トス

入浴時間ハ冷浴熱浴五分半冷浴八分微溫浴十乃至十二分溫浴十
五分間ヲ超エサルヲ例トス其ノ他ハ醫員之ヲ命ス

入浴半時間以上ナルヲ持續浴ト云フ之ヲ行フニハ患者ノ頭首ノ
ミヲ出シ浴盤ノ上ニ毛布ヲ被ヒ時時少許ノ熱湯ヲ浴盤ノ足邊ヨ
リ其ノ壁ニ向ケテ注クヘシ但シ火傷セシメサル様注意スルヲ要
ス

入浴中患者眩暈シ嘔氣ヲ催シ或ハ昏睡スルトキハ直ニ出スヘシ
又衰弱セル患者ニハ入浴前或ハ入浴中葡萄酒茶等ヲ與フルコト
アリ

入浴終ラハ身體ヲ拭ヒ就褥セシメ感冒ヲ防クヘシ
患者入浴ヲ厭フトキハ懇諭シ猶聽カサレハ醫員ニ報シテ處置ヲ
請フヘシ

二、局所浴ニハ又左ノ種類アリ

半身浴ハ患者浴盤ノ中ニ坐シテ湯ノ心窩或ハ臍ニ至ルヲ度トス
坐浴ハ坐浴盤ニテ行フ

臂浴及手浴ハ前膊及手ニ創傷或ハ疾病アルトキ冷浴温浴又ハ藥

浴トシテ施スモノニシテ手浴盤ヲ用フ（第百二

十一圖）但シ手浴ニハ通常ノ盥ヲ用フルコトヲ

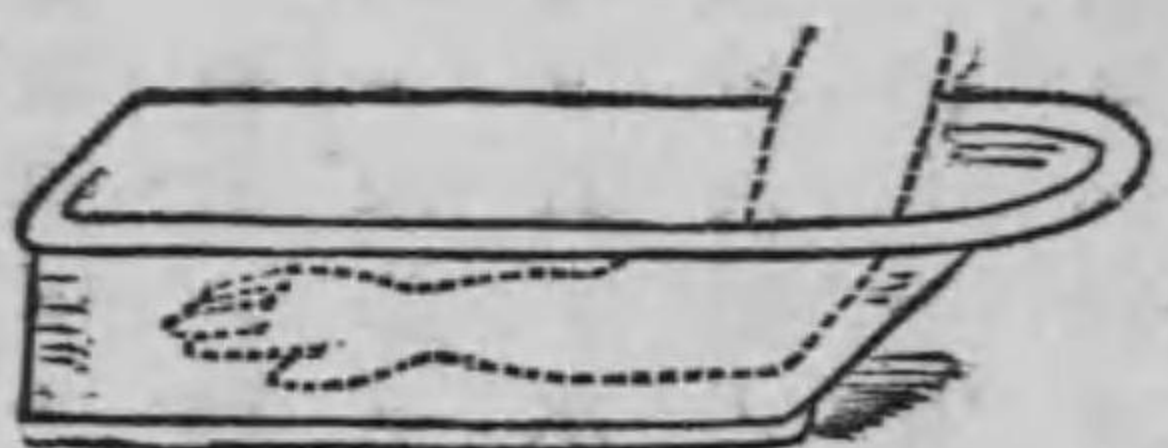
得浴水ニ昇汞ヲ加ヘタルトキハ金屬製ノ浴盤若

ハ盥ヲ用フヘカラス

脚浴ニハ脚浴盤若ハ桶ヲ用フ感冒ニ罹ラサル如

クスヘシ

第百二十一圖



浴

三、灌水浴ニハ水ヲ用フルコトアリ或ハ湯ヲ用フルコトアリ患者ヲ空浴盤若ハ微温湯ヲ盛リタル半身浴盤ノ中ニ坐セシメ盤ノ傍ニ椅子若ハ腰掛ヲ置キ看護者其ノ上ニ立チ少シク高キ處ヨリ灌水器或ハ桶ヲ以テ水ヲ患者ノ項背胸又ハ頭部ニ灌クモノナリ其ノ灌クヘキ部位水勢ノ強弱及浴ノ時間ハ醫員之ヲ命ス

四、射浴トハ身體ニ水ヲ線ノ如ク(線浴又ハ雨ノ如ク(雨浴)灌クヲ云フ)線浴ニハ冷水ヲ用ヒ雨浴ニハ多少温メタル水ヲ用フ前者ハ身體ノ一局部ニ後者ハ全身ニ施スヲ例トス部位及時間ハ醫員之ヲ命ス射浴ニハ特別ノ裝置ヲ要スレトモ之ヲ闕クトキハ如露米澤式唧筒等ヲ應用ス

第二 蒸汽浴熱氣浴及發汗

蒸汽浴(露西亞浴及熱氣浴羅馬浴)ハ特ニ設備シタル浴室ニテ行フモ

ノナリ其ノ目的ハ發汗セシムルニアリ浴者ノ感冒ヲ防クヘシ

第百二十二圖

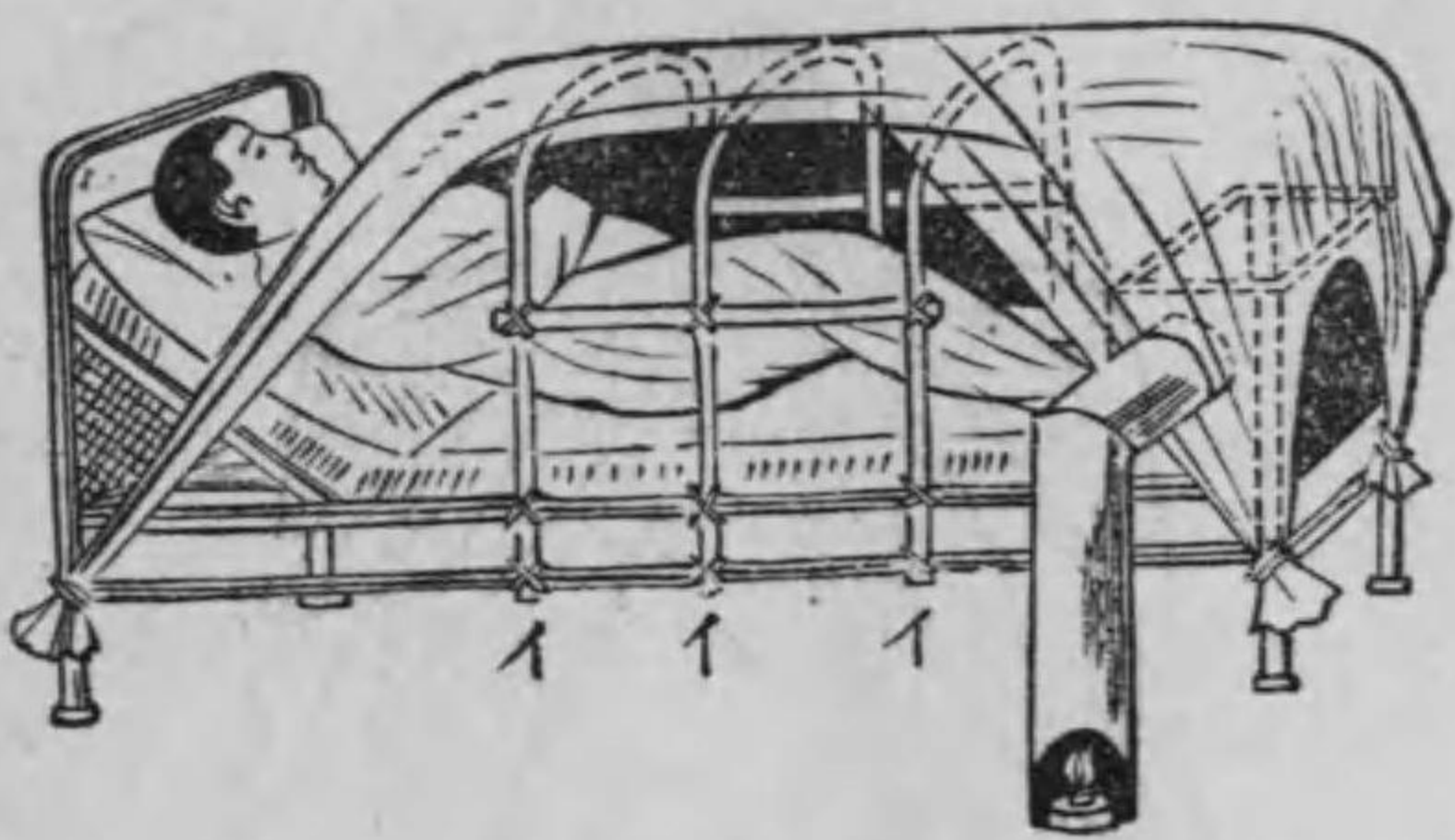


病室ニ於テ坐位ヲ取り得ル患者ニ熱氣浴ヲ施スニハ患者ヲ木製椅子ニ就カセ厚キ毛布ニテ頸以下ヲ包ミ椅子ノ下ニ酒精燈ヲ置クヘシ毛布ハ頸ニ密ニ纏ヒ其ノ下端歩床ニ達スルヲ要ス又椅子ノ前脚ニ横木ヲ附シ誤リテ火傷セサル様ニスヘシ(第百二十二圖)

臥位患者ノ熱氣浴ニハ臥床ニ(イ)ノ如キ裝置ヲ爲シ頸ノ外全身ヲ厚キ毛布ヲ以テ被ヒ上端ハ患者ノ足部ニ下端ハ歩床ニ近ク開口スル

鐵葉製圓筒ヲ裝置シ酒精燈ヲ圓筒ノ下ニ置クヘシ(第百二十三圖)
熱氣浴ヲ實施中頭部ニ充血ヲ來セハ冷罨法ヲ行フヘシ

第百二十三圖



蒸汽浴或ハ熱氣浴ヲ用ヒスシテ發汗セシムルニハ熱浴若ハ溫浴ヲ

第百二十四圖



施シテ就褥セシメ毛布ニテ顔面ノ外全身ヲ包ミ(第百二十四圖)下肢
ノ側ニ湯婆等ヲ置キ多量ノ溫茶ヲ與ヘ病室ヲ適宜ニ溫ムヘシ

第三 砂浴

砂浴ハ全身浴或ハ局所浴トシテ用ヒラル浴盤ニ熱シタル砂ヲ盛リ
テ行フ天然ノ溫砂ニ浴スルコトヲ得ハ尙一層可ナリ(大分縣別府ニ
天然ノ砂浴場アリ)

全身砂浴ノ溫度ハ攝氏五十度ヲ超ユヘカラス局所砂浴ニ於テハ之
ヨリモ稍熱クスルコトヲ得時間ハ半乃至一時間ヲ例トス砂浴後ニ
ハ身體ヲ洗ヒ或ハ通常ノ全身浴ヲ爲シ半乃至一時間毛布ニ包ミ發
汗セシムヘシ

第二十三章 醫療電氣

醫療上最モ多ク使用スル電氣器ハ「ステーレル」式平流電氣器及「スパーマル」式感傳電氣器ナリ(第十二編醫療器械參照)

一、「ステーレル」式平流電氣器ヲ使用スルニハ左ノ方法ニ據ルヘシ

(イ)一端ニ導子ヲ連結シタル導線ヲ連交器ノ縦柱即チ導線受器ニ連著セシム

(ロ)連交器ノ横柱ニ附著セル把柄ヲ鉛直ノ位置トス

(ハ)各硝子壺ニ發電液ヲ盛りタルモノヲ引上ケ擔元器ニ懸垂セル炭板ト亞鉛板ノ下部ヲ液中ニ入ラシム

(ニ)電源連續器ヲ以テ擔元器ノ截痕内ニ兩側相對シテ箝入セル

第一傳導線ニ連續セシム

(ホ)初メ鉛直ノ位置トナセル連交器ノ横柱ニ附著セル把柄ヲ一側ニ傾ク

此ノ如ク裝置シタル後兩導子ヲ接スルトキハ電流積極(十)ヨリ消極(一)ニ向ヒテ流通シ兩導子ノ間ニ導體例之ハ人體ヲ介在セシムレハ其ノ體內ヲ流通ス而シテ電氣ノ強弱ハ算元器ノ位置ニ關係ス即チ其ノ位置電源連續器ヲ離ルルコト愈遠ケレハ愈強ク之ニ反スレハ愈弱シ又其ノ強弱ヲ知ラント欲スレハ算元器ノ存在部ニ於ケル擔元器ノ數字ヲ見ルヘシ又電氣ノ流通ヲ斷絶セシムルニハ連交器ノ横柱ニ附著セル把柄ヲ鉛直トナシ極ヲ變更セ

シムルニハ把柄ヲ反對ノ方向ニ傾クヘシ
此ノ電氣器ヲ使用スルニハ先ツ其ノ電氣ノ極ヲ檢セサルヘカラ
ス其ノ法左ノ如シ

(イ) 亞鉛板ニ結合シタル導線端ハ消極ニシテ炭板ニ結合シタル
モノハ積極ナリ

(ロ) 兩極導子ヲ皮膚殊ニ顔面ニ貼スルニ其ノ感覺強キモノハ消
極ナリ

(ハ) 兩極導子ノ末端ヲ水中ニ沈ムルニ小水泡ノ附著スルモノハ
消極ナリ

(ニ) 兩極導子ヲ水ニ浸セル青色「ラクムス」紙ニ少シク距テ接

スルニ赤色ニ變スルモノハ積極ナリ

二、「スパイメル」式感傳電氣器ヲ使用スルニハ左ノ方法ニ依ル
ヘシ

(イ) 一端ニ導子ヲ連結シタル導線ヲ各導線受器ニ結合ス

(ロ) 栓子装置ノ(P符)或ハ(S符)ニ栓子ヲ挿入ス

(P符)ニ挿入スルトキハ第一感傳電流(S符)ニ挿入スルト
キハ第二感傳電流ヲ得ルモノナントモ通常使用スルモノハ
第二感傳電流ナリ

(ハ) 亞鉛板炭板ヲ發電液中ニ挿入ス此ノ際注意スヘキハ先ツ炭
板ノ下部ヲ挿入シ然ル後徐ニ亞鉛板ノ下部ヲ挿入シ其ノ下

端液體ニ觸レテ「ネーブ」式鍍ノ活動ヲ始ムルト同時ニ挿入ヲ止ムルニ在リ是レ縱令尙深ク挿入スルモ徒ニ電氣ノ發生ヲ促スニ過キサレハナリ

(ニ)電氣ノ強弱ハ金屬圓筒ノ出入ニ依リテ定ム其ノ挿入愈深ケレハ電氣愈強シ故ニ初メ先ツ圓筒ヲ引出シ置キ然ル後徐ニ之ヲ挿入シテ適度ナラシムヘシ

以上ノ外尙「ヒルシユマン」式電氣器等アリ總テ電氣器ノ使用ニ就テハ醫員ノ指示ヲ受クルモノトス

第二十四章

婦人病治療ノ特別介輔

第一

腔洗滌

腔ヲ洗フニハ患者ヲ仰臥セシメ膝ヲ曲ケ脚ヲ開カシメ腰枕ヲ用ヒ臀部ニ受器ヲ置キ硝子製ノ嘴管ヲ有スル灌水器ニ洗滌液ヲ盛り之ヲ適宜ノ高サニ置キ嘴管ヲ腔内ニ挿入ルル前ニ嘴管ヲ開キテ外陰部ニ液ヲ流シツツ送り込ムヘシ而シテ嘴管ハ外陰部ニ觸レサル様ニ注意シ場合ニ依リテハ指ヲ導子トシ稍深部ニ進メテ腔内ヲ十分ニ洗フヘシ腔内ノ洗滌終ラハ外陰部及會陰部ヲモ清潔ニ洗滌スヘシ洗ヒタル液ハ腔内ニ残り易キヲ以テ指ヲ腔ノ後壁ニ沿フテ入レ少シク壓ヲ加フルトキハ流れ出ツルモノナリ洗滌液ハ一〇%リゾール水三〇%石炭酸水三〇%硼酸水等ヲ用ヒ液ノ溫度ハ通常ノ場合ハ攝氏三十六七度ヲ可トス又冷水或ハ熱水ヲ用フルコトアリ腔ノ洗滌ハ醫員ノ命ニ依リテ行フモノトス

第二

腔填塞

腔ノ填塞ハ主トシテ子宮或ハ腔ヨリ出血スルトキニ醫員之ヲ行フ
 モノナレトモ救急ノ場合ニハ看護者亦之ヲ行フコトアリ
 此ノ填塞ニハ長キヨードフオルム綿紗滅菌綿紗或ハ填塞綿球ヲ用
 フルモノニシテ先ツ腔内ヲ洗滌シ子宮鏡ヲ用ヒテ腔ヲ開キ其ノ内
 ニ綿紗ヲ挿ミ入ルルヲ便トス器械ノ用意ナキトキハ左手ノ示指ト
 中指トヲ腔穹窿ニ達スルマテ挿シ入レ指ニ沿ヒ右手ニ長鑷子ヲ以
 テ綿紗ヲ挿入シ先ツ腔穹窿ヲ填塞シ次テ腔ヲ堅ク填塞スルニ至ル
 ヘク出血強キトキハ一層填塞ヲ強クスヘシ腔入口部ニ填塞ノ出テ
 居ルトキハ排尿時ニ不潔トナリ易キヲ以テ只綿紗ノ一端ノミヲ外
 部ニ出タシ置クヘシ
 填塞綿球ハ脱脂綿花ヲ鶏卵大ノ球狀或ハ楕圓形トナシ約五寸ノ絲
 ニテ縛リタルモノニシテ止血ノ爲メニハ多數ヲ用意スヘシ其ノ使

用法ハ概ネ綿紗ニ同シク絲ハ一端ヲ外部ニ出タシ置クヘシ
 填塞後若干時間其ノ儘ニナシ置クカ又ハ取り換フルカハ醫員ノ命
 ニ依ルモ十時間以上放置スヘカラス
 綿球ハ前記ノ他諸種ノ子宮病等ヲ治療スル爲藥液ヲ浸シテ緩ク挿
 シ入ルルコトアリ指定ノ時ヲ經テ抜キ去ルヘシ

第三 子宮鏡用法

子宮鏡ヲ使用スルハ醫員ノ爲スヘキモノナレトモ救急處置ノ爲看
 護者亦之カ使用ヲ熟知シ置クノ要アリ
 子宮鏡ハ通常クスコ氏子宮鏡ヲ用フ之ヲ煮沸消毒シ次テ外陰部ノ
 清潔消毒ヲ施シタル後子宮鏡ノ嘴端ニ硼酸ワゼリンヲ塗り而シテ
 陰唇ヲ拇指ト示指トニテ左右ニ開キ子宮鏡ノ嘴端ヲ閉チタル儘少
 シク之ヲ斜ニシテ腔口ニ挿シ入レツツ徐ニ嘴端ヲ腔ノ後壁ニ沿フ

テ進メ後腔穹窿部ニ達シタルトキハ僅ニ引キ戻シ把柄ニアル螺旋ヲ進メテ嘴端ヲ開クヘシ然ルトキハ子宮腔部ハ兩嘴間ニ顯ハレ子宮外口及出血ノ狀況ヲ認メ得ヘシ又腔壁ノ狀態ヲ檢スルニハ早クヨリ嘴端ヲ半ハ開キツツ進ムルトキハ目的ヲ達シ得ヘシ
 子宮鏡ヲ去ラントスルトキハ嘴端ヲ引キ出スニ從ヒテ之ヲ閉チ半開ノ儘抜キ去ルヘシ使用ニ慣レサルトキハ往往腔ノ粘膜ヲ箠ムコトアリ注意スヘシ

第八編 手術ノ介輔

第一章 手術ノ準備

第一 手術室

手術ノ前ニハ手術室ノ窓ヲ開キ空氣ヲ流通セシメ如露ニテ水ヲ高ク飛散セシメ濕布ニテ室内ヲ拭フヘシ室内ノ溫度ハ攝氏二十乃至二十二度ヲ可トス但シ開腹術ヲ施スニハ二十五度内外ニ溫ムルヲ要ス

手術臺ニハ窓ヨリ射入スル光線ヲシテ其ノ上ニ映セシムヘシ但シ日光直射スルトキハ窓掛ニテ之ヲ遮ルヘシ夜ハ電燈或ハ其ノ他ノ燈火ニテ十分ニ照スヲ要ス

手術臺ニハ清キ防水性材料ヲ敷キ其ノ上ヲ滅菌シタル布ニテ被
フヲ例トス

手術室内ニハ二三ノ小机及三四ノ椅子(椅背ナキモノ)ヲ備ヘ手
洗湯消毒液酒精石鹼鉢爪洗刷毛皮膚洗刷毛手巾及活栓等ヲ點檢
シ置クヘシ

手術終ラハ器械ヲ清メ整頓シ繃帶材料ヲ納メ次ニ室ト諸具トヲ
清ムヘシ

第二 器械繃帶材料及其ノ他ノ諸具

手術ニ要スル器械繃帶材料等ハ其ノ種類ト性質トニ從ヒ煮沸熱
蒸汽熱或ハ藥液ヲ用ヒテ消毒(滅菌)スヘシ其ノ各物ニ對スル適

當ナル消毒法左ノ如シ

- 一、煮沸消毒ニ適スルモノハ金屬製器械刷毛絹糸「ゴム」排膿
管等トス但シ絹糸ハ特種ノ煮沸方法ニ從フモノトス
 - 二、蒸汽消毒ニ適スルモノハ綿紗脫脂綿「フランネル」布縮織
布生金巾亞麻布等ニテ作レル繃帶材料手術衣及手巾等ナリ
 - 三、煮沸及蒸汽消毒ニ適セサルモノハ防水性繃帶材料驅血帶
止血管腸線「ゴムカテーテル」「ゴムブリージー」「胃洗滌器胃管
「ブリージー」「鯨線附尿道」カテーテル」「革製吸子附注射器等ニ
シテ是等ハ醫員ノ示ス方法ニ從ヒ消毒スルモノトス
- 消毒装置ニハ種種アリ其ノ中陸軍ニ於テ用フル野戰滅菌器ハ甚タ
輕便ナルモノナリ此ノ器ハ蒸汽消毒器ニシテ綿紗滅菌槽器械滅菌

槽爐「ズツク」袋盤及匙等ヨリ成ル滅菌槽ハ各被滅菌物ヲ容ルヘキ金屬線ノ籠ヲ備フ袋ハ消毒スヘキ繃帶材料ヲ容レ盤ハ消毒シタル器械ヲ受ク匙ハ曹達水ノ原料ナル炭酸「ナトリウム」ヲ量ルニ用ヒラル此ノ器ヲ用フルニハ先ツ爐ノ上ニ曹達水ヲ盛リタル器械滅菌槽ヲ置キ之ニ綿紗滅菌槽ヲ載セ然ル後爐中ニ火ヲ焚クヘシ器械ヲ消毒スルトキハ刀ノ如キ鋭刃ヲ有スルモノニハ綿花ヲ纏ヒテ保護ヲ加ヘ曹達水ノ沸騰後十乃至十五分時ヲ經テ消毒ヲ終ル繃帶材料ヲ消毒スルトキハ布片ヲ金屬線ノ籠ノ底ニ敷キ煮沸スルトキ飛散スル曹達水ノ材料ヲ濕スヲ避ク消毒ハ曹達水ノ沸騰後約四十分時ニシテ了ル

看護者ハ手術前ニ醫員ノ命ヲ受ケ手術ニ要スル器械ヲ整頓シ其ノ銳鈍及刃尖ニ缺損ノアルヤ否ヤヲ検査シ樞軸アルモノニ在リ

テハ其ノ活動ヲ試ミ之ヲ消毒シタル後手術臺ノ側ノ滅菌布ヲ敷キタル机ノ上ニ置キ消毒セル布ニテ之ヲ被フヘシ又別ニ石炭酸水或ハ「リゾール」水ヲ盛レル皿或ハ鉢ヲ他ノ机ノ上ニ備ヘ一タヒ使用シタル器械ヲ浸スニ用フ

手術ニ要スル繃帶材料ハ机ノ上ニ竝ヘテ適宜ノ處ニ置クヘシ其ノ他昇汞水或ハ他ノ消毒液ヲ盛リタル鉢創液及廢水ヲ受クル器棄ツヘキ繃帶材料ヲ受クル器洗ヒタル後消毒シテ再ヒ用フヘキ繃帶材料ヲ受クル器大小膿盤灌水器食鹽水注射器皮下注射器滅菌食鹽水「カンフル」油酒精飲料等ヲ備フヘシ

手術器械等ヲ備ヘ畢ラハ麻醉藥及麻醉藥用器ヲ机上適當ノ所

ニ置クヘシ
使用シタル器械ハ刷毛及約一・〇％ノ熱キ曹達水ヲ以テ洗ヒ拭
ヒテ納ムヘシ

第三 患者ノ手術部看護者ノ手臂

身體ノ表面ニハ種種ノ細菌就中化膿ヲ起ス細菌存スルヲ以テ患
者ノ手術部及看護者ノ手臂ハ消毒スルヲ要ス而シテ此ノ細菌ハ
身體ノ表面ノミナラス皮脂腺ノ排泄管毛嚢等其ノ内部ニモ竄入
スルヲ以テ其ノ消毒ハ最モ嚴密ナラサルヘカラス若之ヲ怠ルト
キハ縦令器械繃帶材料等ニ如何ナル消毒ヲ行フモ到底防腐ノ目
的ヲ達スル能ハサルモノナリ

其一 患者ノ手術部

手術ニ臨ミテハ先ツ患者ヲ入浴セシメテ身體ヲ清潔ニシ（衰弱
セル者高熱ノ者又ハ創ノ狀況ニ依リ入浴セシメ難キ者ハ全身ヲ
清拭ス）頭髮ヲ洗ヒ手術部ノ毛ヲ剃リ去ルヘシ但シ頭蓋其ノ他
長キ毛アル處ニテハ先ツ其ノ周圍ノ毛ヲ剃リタル後剃ルヘシ
手術ノ直前ニ於テ施スヘキ消毒法ニ種種アリ左ノ如シ
一、「ヨード」丁幾消毒法ハ最簡便且確實ナルモノニシテ特殊ノ
場合ヲ除クノ外一般ニ用ヒラレ通常五・〇乃至一〇・〇％ノモ
ノヲ使用ス而シテ其ノ使用法ハ手術部ヲ洗滌スルコトナク乾
燥ノ儘剃毛セル後二三回塗布スルヲ以テ足レリトス

二、加里石鹼ヲ消毒セル刷毛或ハ絲瓜^{ヘナ}ニ塗り温キ滅菌水ヲ以テ擦ルコト約十分時間ニシテ其ノ泡ヲ去リ滅菌布ヲ以テ其ノ部ヲ十分ニ乾拭シ七〇・〇%ノ酒精ヲ用ヒ刷毛ニテ約三分時間擦リ更ニ千倍乃至二千倍ノ昇汞水ヲ用ヒテ擦ルコト約三分時間ニシテ消毒ヲ終ル(刷毛或ハ絲瓜ハ使用後煮沸或ハ蒸汽消毒ヲナスヘシ已ムヲ得サレハ温湯ニテ洗ヒ昇汞水ヲ以テ消毒ス又手術室ニ於ケルカ如ク屢之ヲ使用スル處ニテハ常ニ昇汞水中ニ貯フヘシ)

三、石鹼精消毒ハ甚タ單簡ニシテ刷毛ニ其ノ液ノ多量ヲ浸シ擦ルコト約五分時間ニシテ消毒ヲ終ルモノトス然レトモ火ヲ引キ易キヲ以テ熔白金ヲ要スル手術ニハ用フヘカラス又眼ニ入ルトキハ劇痛ヲ發スルカ故ニ眼ノ近傍ニ用ヒントスルトキハ最注意スヘシ其ノ他床上ニ附著スルトキハ滑倒スル虞アルヲ以テ丁寧ニ拭ヒ去ルヘシ

消毒ヲ行フニ當リ皮膚甚シク不潔(例之ハ器械油脂肪等ニテ汚サレタル手ノ如シ)ナルトキハ「エーテル」或ハ石油「ベンチン」ニテ拭ヒタル後清潔法ヲ施スヘシ但シ「エーテル」及「ベンチン」ハ火ヲ引キ易キヲ以テ注意スルヲ要ス

手術部ニ創アルトキハ右ノ清潔法ヲ行フ間其ノ創ヲ消毒綿紗ニテ密ニ被ヒ洗滌液ノ入ルヲ防クヘシ

皮膚ノ清潔法ハ手術ノ部ニ限ラス廣ク其ノ附近ニ及フヲ要ス又一旦清メタル部ヲ再ヒ汚ササル爲其ノ外圍或ハ患者ノ全身ヲ消毒セル布片ニテ被フヘシ且消毒法ヲ施ササル手又ハ器械等ヲ其ノ部ニ觸ルヘカラス

顔面及頸部ノ手術ニ在リテハ「ゴム」帽或ハ滅菌布ヲ以テ頭髮ヲ纏絡シ眼ヲ綿紗ニテ被ヒ或ハ鼻腔外聽道口ニ脫脂セサル滅菌綿紗ヲ充填スルコトアリ是レ血液又ハ膿ノ其ノ間ニ流入スルヲ防クタメナリ腹部ノ手術ニ在リテハ上記消毒ノ外臍窩ニ「ヨード」丁幾ヲ塗布シ陰部ノ近傍ニ於ケル手術ニハ陰莖及陰囊ニ無菌性ノ繃帶ヲ施シ女子ニ在リテハ膈内ニ綿紗ヲ充填スルノ必要アル

コトアリ口内手術ニ在リテハ先ツ齒ヲ磨キ或ハ齲齒齒石ヲ有スル者ハ掃齒器ヲ以テ之ヲ除キ過酸化水素水硼酸水等ニテ數回含漱セシムルヲ要ス其ノ他膈又ハ肛門内ノ手術ニ在リテハ加里石鹼ヲ「ゴム」製齒刷子ニ附シ其ノ内壁ヲ清メ次テ稀薄ナル消毒液ニテ洗フヘシ

其二 看護者ノ手臂

手術ノ介輔ヲナス看護者ノ手臂ハ嚴ニ消毒スルヲ要ス其ノ法左ノ如シ

先ツ袖ヲ上膊ノ中央マテ捲リ上ケ手及前膊ヲ露ハシ爪ヲ切り爪甲除垢子ニテ爪ノ下緣爪ノ皺襞及指尖ノ垢ヲ除キ手術部消毒ノ

條ニ述ヘタル方法ニ從ヒ嚴ニ消毒スルヲ要ス但シ「ヨード」丁幾消毒ハ數日間著色シテ不潔ノ觀ヲ呈シ往往皮疹ヲ發スル等ノコトアルヲ以テ行ハサルヲ良トス
 既ニ消毒ヲ行ヒタル後ハ無菌ノ物ノ外觸ルヘカラス若觸レタルトキハ更ニ消毒スルヲ要ス
 手術衣ハ手臂ノ消毒ヲ終リタル後他ノ看護者ノ補助ニヨリテ著スヘシ

第二章 手術中ノ介輔

看護者ノ數十分ナルトキハ手術中ノ介輔ヲ左ノ如ク分擔スルヲ例トス

- 一、第一看護者ハ器械ヲ授受ス此ノ者ハ器械ノ名稱ヲ熟知スルヲ要ス(第十二編醫療器械參照)而シテ終始術者ノ舉動ニ注意シ咄嗟其ノ用ニ應シ決シテ輕躁ノ舉動アルヘカラス刀刃類ヲ手術者ニ渡スニハ鈍端ヲ前ニス若器械或ハ手ノ消毒セサル物品ニ觸レタルトキハ更ニ消毒スルヲ要ス
 器械ハ成ルヘク鉗子ノ類ニテ持チ手ニ觸レサルヲ可トス床ニ落チタル器械ヲ自ラ拾フヘカラス
- 二、第二看護者ハ繃帶材料ヲ授受ス繃帶材料ハ成ルヘク鉗子ノ類ニテ持チ手ヲ觸レサルヲ可トス消毒セサル物品ニ觸レタル繃帶材料ハ用フヘカラス

三、第三看護者ハ床ニ落チタル器械ヲ拾ヒ清メ消毒スル外雜用ヲ辨スヘシ此ノ者ノ手ハ不潔ナルヲ以テ消毒セル器械繃帶材料及手術部ニ觸ルヘカラス

醫員不足ナルトキハ別ニ看護者二名ヲ要ス一ハ麻醉ヲ掌ラシメ一ハ脈膊及呼吸ヲ觀察セシム

第二章 麻醉ノ介輔

麻醉ハ醫員自ラ行ヒ看護者ハ其ノ介輔ヲナスモノトス然レトモ已ムヲ得サルトキ看護者自ラ醫員監視ノ下ニ之ヲ行フコトアリ

第一 全身麻醉

全身麻醉トハ揮發性麻醉藥ヲ瓦斯態ニナシテ吸入シ全身ノ知覺

ヲ亡失セシメ以テ睡眠セシムルヲ云フ其ノ藥物ハ通常「クロロフォルム」及「エーテル」ヲ用フ共ニ無色ノ液體ニシテ特異ノ香氣ヲ放ツ常ニ著色瓶ニ貯ヘ密閉シ置クヲ要ス

全身麻醉ヲ施スニハ滴瓶(麻醉藥ヲ入レ點滴セシムル瓶ナリ)假面舌鉗子開嚥子長柄鉗子皮下注射器「カンフル」油「モルヒネ」水聽診器膿盤(吐物ヲ受クルニ用フ)手巾綿球ヲ備フルヲ要ス

麻醉セシメントスル初ニハ被服ノ緊縛ヲ除キ胸腹ヲ露ハシ義齒アラハ之ヲ除クヘシ次ニ仰臥セシメ低キ枕ヲ當テ頭ヲ正シクシ眼ハ綿紗ニテ被フヘシ麻醉藥ヲ與ヘ始ムルトキハ靜ニ呼吸セシメ又ハ聲高ク數ヲ算ヘシムルモ可ナリ

假面ハ口ト鼻トヲ被ヒ其ノ下端ヲ頤ニ達セシメ眼部ニ至ルヘカ
 ラス之ニ「クロロフォルム」ヲ滴ラスニハ同一處ニ續ケテ落スヘ
 カラス又初ハ特ニ徐ニ滴ラスヘシ「クロロフォルム」ヲ皮膚ノ上
 ニ滴ラシ又眼ニ流レ入ラシムヘカラス誤リテ皮膚殊ニ眼ノ附近
 ニ滴ラシタルトキハ直ニ拭フヘシ「クロロフォルム」ノ滴下ハ患
 者ノ麻醉スルマテ續クヘシ麻醉シタリヤ否ヤヲ知ルニハ臂ヲ持
 チ少シク擧ケテ放ツヘシ麻醉十分ナレハ臂ハ力ナク落ツヘシ其
 ノ最良ナルハ眼ヲ開キ指頭ヲ輕ク角膜ニ觸ルルニ在リ麻醉充分
 ナレハ毫モ之ニ感セサレトモ然ラサルトキハ忽チ眼ヲ閉スモノ
 トス又初メ麻醉藥ニ刺戟セラレ咳嗽スルコトアリ窒息様苦悶ア

ルコトアリ此ノ如キトキハ暫ク假面ヲ顔ヨリ離シテ持チ「クロ
 ロフォルム」ヲ滴ラスヘシ又後ニ至リテモ時時假面ヲ顔ヨリ離
 シテ清キ空氣ヲ吸ハシムルヲ可トス患者ニ依リテハ（殊ニ飲酒
 家）初メ興奮シテ叫喚シ手足ヲ動カシ又ハ起キントスルコトア
 リ靜ニ保護ヲ加ヘ「クロロフォルム」ヲ與フルコトヲ繼續スヘシ
 十分ニ麻醉シタル後猶「クロロフォルム」ヲ與フヘキヤ否ヤハ手
 術ノ狀況ニ依リ醫員之ヲ命ス

全身麻醉中最注意ヲ要スヘキハ呼吸脈搏及瞳孔ニシテ其ノ呼吸
 ハ始終正シキコトアリ或ハ初メ淺クシテ促迫シ或ハ深淺不同ナ
 ルコトアリ然レトモ麻醉ノ進ムニ從ヒ多クハ安靜ニシテ正シク

ナルモノナリ脈搏ハ麻酔セシムル前平常ノ脈搏ヲ檢シ置クヘシ
 麻酔ノ初ハ脈數加ハリ漸クニシテ徐ニナルモノナリ
 瞳孔ハ麻酔ノ進ムニ從ヒテ光ニ反應スルコト鈍クナリ平常ヨリ
 モ縮小ス(瞼ヲ舉クルトキ眼球ニ觸ルヘカラス)麻酔シテ瞳孔ノ
 散大スルハ危險ノ徵ナリ
 麻酔中障礙(呼吸ノ間歇脈搏ノ結代不整弱小瞳孔ノ散大)アルト
 キハ假面ヲ去リ醫員ニ告クルヲ要ス
 全身麻酔ノ初ニハ呼吸中絶シ顔面青赤色トナルコトアリ此ノ時
 ハ假面ヲ去リ呼吸ヲ回復セシメ然ル後麻酔ヲ續クヘシ
 麻酔中粘液咽頭ニ集リ喘鳴ヲ發スルコトアリ此ノ時ハ頭ヲ傾ケ

第百二十五圖



子ヲ用フヘシ

舌後方ニ落ち(舌筋麻痺)テ窒息スルコトアリ左右ノ下顎ノ隅ニ

柄附綿球(綿球ヲ麥粒鉗子ニ挟ミタルモノ)又ハ指ニ綿紗ヲ纏ヒ
 タルモノニテ口及咽頭ヲ拭フヘシ但シ齒ヲ喰ヒシハリ居ラハ開

噤子ヲ白齒ノ間ニ入レテ開クヘシ

麻酔中嘔吐スルコトアリ殊ニ麻酔前飲食
 シタル患者ニ多シ手術前食ヲ斷タシムル
 ハ之カ爲ナリ若吐クトキハ頭ヲ舉ケ傾ケ
 テ手術部ノ反對側ニ向ケ吐物ヲ膿盤ニ受
 クヘシ(第百二十五圖)但シ要スレハ開噤

指ヲ當テ之ヲ前上方ニ強ク引キ上ケ下ノ齒列ヲ上ノ齒列ノ前ニ

出ツル如クスヘシ此ノ

如クスルトキハ舌骨舉

カリ舌ヲ前ニ引キ出ス

ニ同シキ効ヲ奏スヘシ

猶呼吸セサルトキハ開

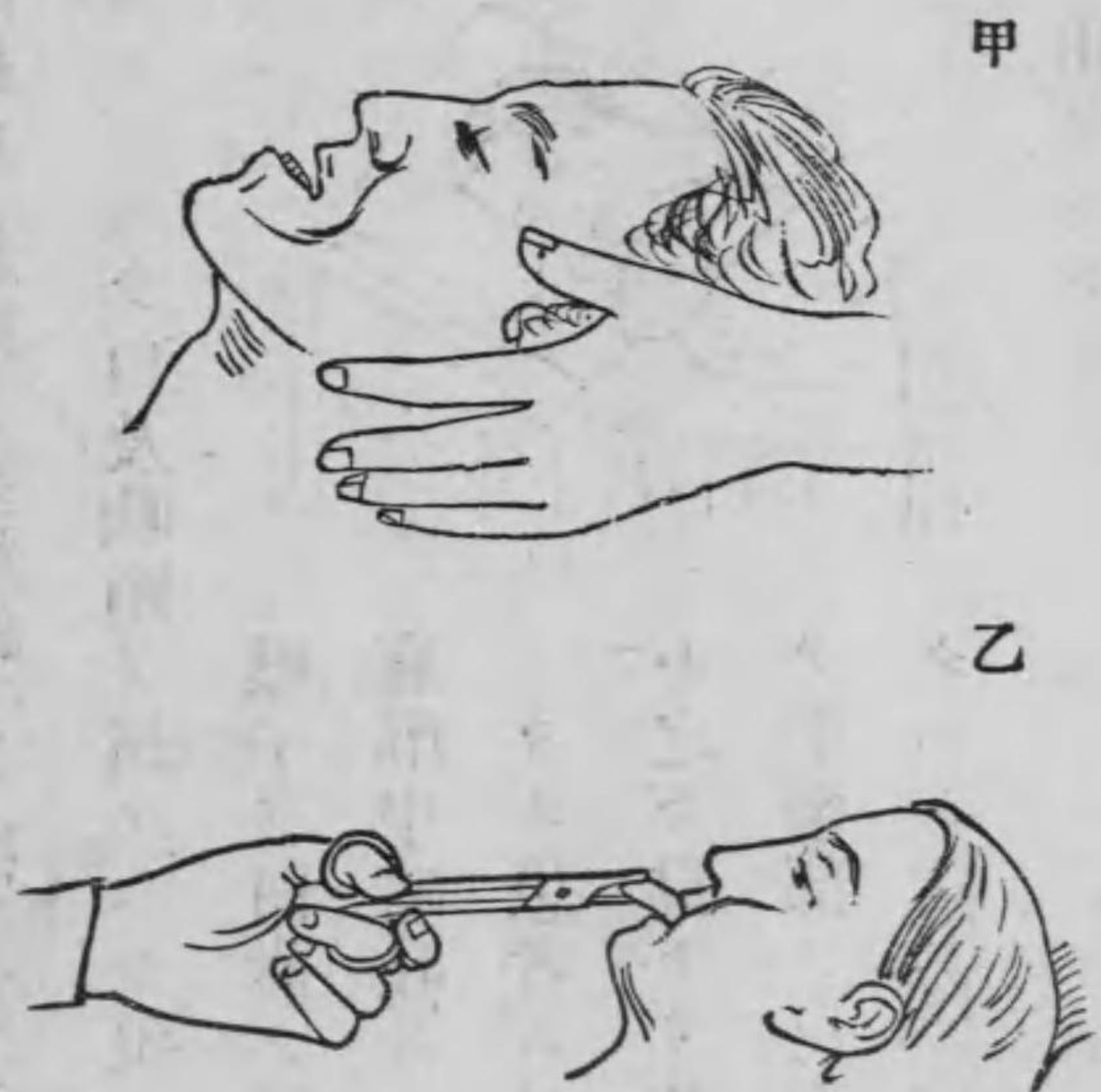
嚙子ヲ以テ口ヲ開キ舌

鉗子ニテ舌ヲ前ニ引出

シ要スレハ口及咽頭ヲ

拭フヘシ若猶呼吸セサ

第百二十六圖



ルトキハ人工呼吸法ヲ施スヘシ(第百二十六圖)

脈搏ノ不正ニシテ細クナリ指ニ觸レサルニ至ルハ危險(心臟麻

痺)ノ徵ナリ此ノ時呼吸ハ變セサルコトアリ是レ多クハ一時ニ

「クロロフォルム」ヲ多ク用ヒタルニ依ル速ニ假面ヲ去リテ状態

ヲ觀察シ必要アラハ人工呼吸法ヲ施スヘシ其ノ他ノ救治法ハ醫

員之ヲ行フ

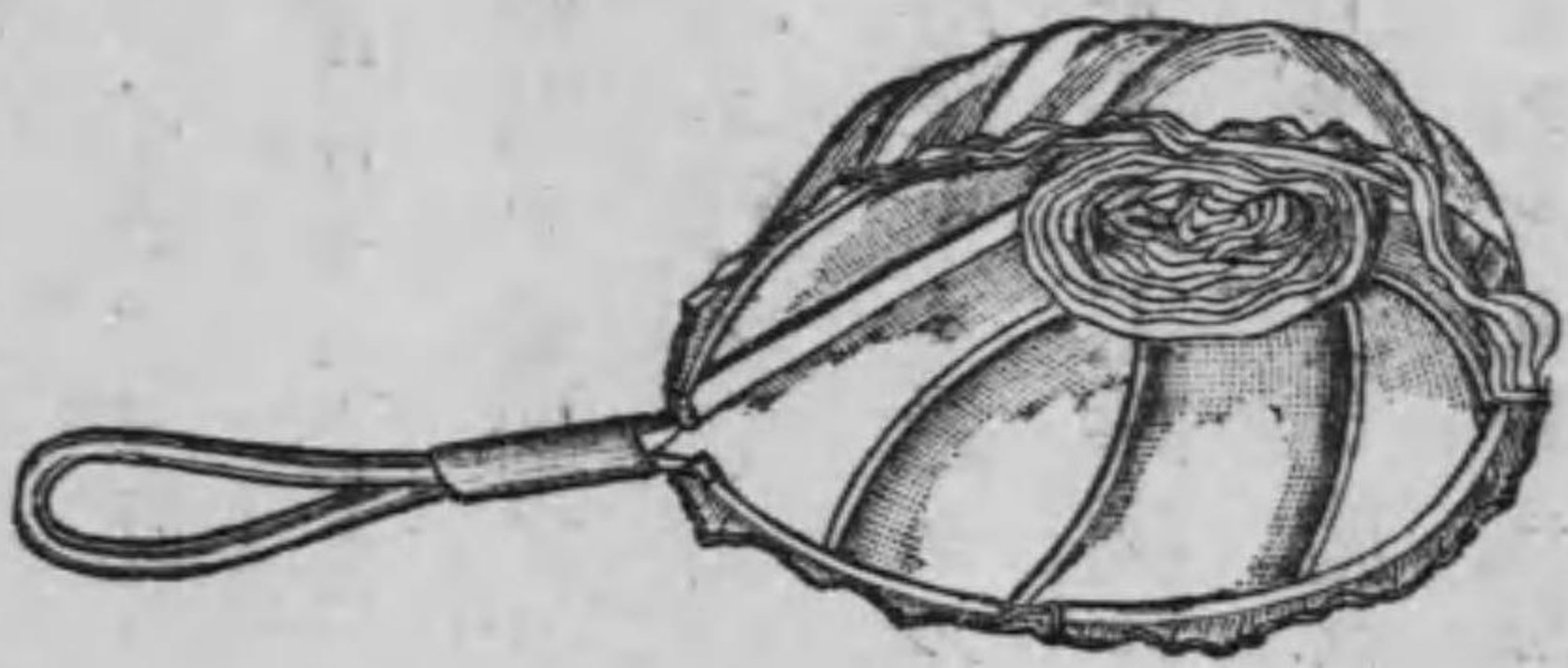
麻醉深キニ過クルトキハ瞳孔散大シ光ヲ入ルルニ縮小セス假面

ヲ去リ人工呼吸法ヲ施スヘシ

人工呼吸法ヲ施ストキハ手術部ヲ消毒セル布ニテ被フヘシ

「エーテル」麻醉ニ用フル假面ハ種種アレトモ多ク用ヒラルルモノハ

第百二十七圖



チユイヤール氏假面ナリ(第百二十七圖)此ノ假面ハ顔面ノ全部ヲ被フ位ノ大サニシテ外部ニ油紙ヲ被ヒ内部ニ數層ニ疊ミタル「フランネル」ヲ附シテ「エーテル」ノ吸收ニ便ニセリ之ヲ使用スルニハ約二〇〇瓦ノ「エーテル」ヲ其ノ「フランネル」ニ注キ徐ニ顔面ニ近ケタル儘接著セスシテ持チ一二分時ヲ經テ更ニ同量ノ「エーテル」ヲ注キ顔面ヲ全ク被フテ吸入セシムヘシ然レトモ「クロフォオルム」吸入ノ假面ヲ用ヒ之ト同一ノ方法ニ依リテ麻醉ヲ行フモ差支ナシトス

第二 局所麻醉

局所麻醉トハ手術ヲ施サントスル局部ノミ麻醉セシムルヲ云フ

「エーテル」「クロールエチル」等ノ霧吹キヲ以テ皮膚ニ寒冷ヲ加ヘ局所ヲ麻醉セシムルコトアリ(寒冷麻醉)効力極メテ弱シ多クハ藥液ヲ注射シテ局所麻醉ヲ行フモノトス之ニ浸潤麻醉傳達麻醉及脊髄麻醉ノ區別アリ

一、浸潤麻醉 シユライヒ氏液「ノボカイン」液等ヲ麻醉セシメントスル皮膚ニ注射スルモノナリ

二、傳達麻醉 手術部ニ分布スル神經ノ幹部ニ向テ注射シ手術部ヲ無痛ナラシメントスルモノナリ主トシテ「ノボカイン」液ヲ用フ

三、脊髄麻醉 腰部ニ麻醉藥ヲ注入シテ下半身ヲ麻醉セシムル

ヲ云フ此ノ法ハ兩腸骨櫛ノ高サニ於テ腰椎ノ棘狀突起間ニ長サ七糎許ノ注射針ヲ刺入シテ脊髓膜内ニ達セシメ之ニ通例「トロバコカイン」溶液ヲ注射スルニアリ注射後五分乃至十分間ヲ經レハ漸次腰部以下兩下肢ニ麻痺ヲ來セトモ意識ニ變化ヲ受クコトナク又腰部以上ニ及ホスコトナシ

第四章 手術前後ノ看護

病ニ障礙ナキ限りハ手術ノ前日又ハ當日入浴セシメ被服ヲ更フヘシ口腔或ハ口ノ附近ノ手術ニハ數日前ヨリ消毒液ニテ含漱セシムルヲ要ス又胃肛門等ノ手術ニ際シテハ醫員ノ命ヲ受ケ豫メ洗滌スルヲ要ス

手術ノ前日ニハ下劑ヲ與ヘ手術部ヲ剃毛シ當日ハ灌腸スヘシ術前ニハ絶對ニ飲食物ヲ與ヘス烟草モ之ヲ禁スヘシ患者ヲ手術室ニ送ル前ニハ義齒アラハ之ヲ除去シ又必ス放尿セシメ若能ハサレハ導尿スヘシ

患者ノ寢臺ハ手術中ニ整頓シ敷布ヲ新ニシ置クヘシ患者ヲ寢臺ニ返ストキ若湯婆ヲ要セハ火傷セサル様注意スヘシ殊ニ麻醉ノ十分ニ醒メサル時ニ然リトス

手術後患者ヲ臥床ニ返シテヨリ少クモ一時間ハ之ヲ看侍シ呼吸脈搏嘔吐竝縲帶ノ狀況ニ注意シ異變アラハ醫員ニ報スヘシ手術後ニハ眠ラシムルヲ可トス覺ムルトキ吐クコトアルヲ以テ吐物

ヲ受クル準備ヲナシ置クヘシ湯ヲ訴フルトキハ含漱セシメ已ム
ナクハ少許ノ氷片ヲ與フヘシ猥リニ飲料ヲ與フヘカラス
看護者ハ患者及其ノ手術ニ立會ハサリシ者ニ手術ニ關スルコト
ヲ話スヘカラス

第九編 消毒

本編ノ消毒トハ傳染病患者ノ分泌物排泄物ニ含ミテ體外ニ出ル
病毒及患者ニ觸接スル被服物品等ニ附着セル病毒ヲ滅却スル方
法ニシテ傳染病ノ蔓延ヲ防クニ極メテ必要ナルモノナリ故ニ之
ヲ實施スルニ當リテハ周密ナル注意ヲ加ヘ毫モ遺漏ナカラシム
トヲ要ス

第一章 消毒ノ方法

消毒方法ニ適用スルモノハ燒却蒸汽消毒煮沸消毒藥物消毒ノ四
種トス

第一 燒却

燒却スヘキモノハ傳染病患者若ハ死體ニ用ヒタル被服便器其ノ他ノ器具等ニシテ甚シク病毒ニ汚染シ消毒後再ヒ使用ニ供スル目的ナキモノ及傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他ノ排泄物塵芥等ナリ

第二 蒸汽消毒

蒸汽熱ヲ適用スルニ供スル蒸汽消毒装置ハ蒸汽罐消毒筒及此ノ二者ヲ結ヒ合スル蒸汽導管ヨリ成リ蒸汽罐ニテ生シタル蒸汽ハ導管ヲ通り上ヨリ消毒筒ニ流入シ下ノ流出口ヨリ流レ出ツ消毒ノ際先ツ消毒筒中ノ空氣ヲ驅逐シ一時間以上攝氏百度以上ノ濕熱ニ觸レシムヘシ

消毒スヘキ物ヲ消毒筒ニ納ムルニハ其ノ物ノ全面ニ蒸汽ノ觸ル

ル如クニナシ置クヘシ血液膿等ニテ汚レタル物ハ消毒筒ニ納ムル前石炭酸水ニテ濕スヘシ

蒸汽消毒ニ適スルモノハ衣服臥具布片硝子器陶器其ノ他金屬製若ハ木製品等ニシテ汽熱ニ堪フルモノトス

第三 煮沸消毒

消毒スヘキ物ヲ全部水中ニ浸シ蓋ヲ被ヒ沸騰後十五分間以上煮沸スヘシ煮沸水中ニ約一・〇%ノ割合ニ曹達ヲ加フルコトヲ得煮沸消毒ニ適スルモノハ蒸汽消毒ニ同シ

第四 藥物消毒

消毒藥中主ナルモノ左ノ如シ

一、石炭酸水(約三十三倍)防疫用石炭酸三分普通食鹽五分水九十二分

石炭酸水ヲ製スルニハ定量ノ防疫用石炭酸及普通食鹽ニ少量ノ水ヲ加ヘ攪拌又ハ振盪シツツ徐徐ニ水ヲ注キ定量ニ至ラシムヘシ温湯ヲ用フレハ其ノ溶解殊ニ速ナリトス

石炭酸水ハ各種物件ノ消毒ニ適ス但シ使用ノ際ハ毎回振盪シ左ノ諸件ニ注意スヘシ

(イ)兩便吐瀉物其ノ他排泄物ニハ同容量ヲ加ヘ能ク攪拌シタル後二時間以上放置スヘシ

(ロ)器具室内等ヲ消毒スルニハ擦拭又ハ撒布スヘシ

(ハ)衣類等ヲ消毒スルニハ二時間以上浸漬スヘシ

二、「クレゾール」水「クレゾール」石鹼液六分水九十四分

「クレゾール」水ヲ製スルニハ「クレゾール」石鹼液六分ニ定量ノ水ヲ加フヘシ

「クレゾール」水ハ各種物件ノ消毒ニ適シ其ノ用量及應用ハ石炭酸水ニ準スヘシ

三、昇汞水(約千倍)昇汞一分普通食鹽一分水千分

昇汞水ヲ製スルニ定量ノ昇汞及普通食鹽ヲ定量ノ水ニ溶解シ又ハ昇汞錠(一錠中昇汞〇・五瓦ヲ含ム)ヲ一錠ニ付水約五百瓦ノ割合ニ溶解スヘシ

昇汞水ハ猛毒ニシテ無色無臭ナルカ爲危険ヲ招キ易キ虞アリ

故ニ貯藏ノ際十分ニ注意ヲ加ヘ又其ノ危険ヲ防カン爲「スカ
 レット」又ハ「ゾイレフクシン」其ノ他適當ノ色素ヲ加ヘテ著
 色シ一見識別シ易カラシムルヲ要ス（昇汞錠ニハ既ニ色素ヲ
 加ヘアリ）但シ金屬製ノ器ニ貯藏スヘカラス
 昇汞水ハ陶器硝子器木製器具又ハ室内ノ消毒ニ適ス飲食用器
 具玩具ノ消毒飲料水ニ滲透スヘキ場所ノ消毒及金屬製品糞便
 吐瀉物ノ消毒ニ用フヘカラス
 四、生石灰 少量ノ水ヲ灌ケハ熱
 ヲ發シ崩壊スルモノ
 生石灰末 生石灰ニ少量ノ水ヲ加
 ヘ粉末ト爲シタルモノ
 生石灰末ハ用ニ臨ミ之ヲ製シ吐瀉物其ノ他ノ排泄物溝渠等ノ

消毒ニ用フヘシ吐瀉物其ノ他ノ排泄物ヲ消毒スルニハ少クモ
 其ノ容量五十分ノ一ヲ投シ能ク攪拌スヘシ

五、石灰乳（十倍） 生石灰一分
 水九分
 石灰乳ヲ製スルニハ一分ノ生石灰ニ九分ノ水ヲ徐ニ加ヘ能ク
 攪拌スヘシ其ノ用量ハ吐瀉物其ノ他排泄物等ノ容量四分ノ一
 以上トス但シ石灰乳ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ使用ノ際ハ毎回攪
 拌スルヲ要ス

六、普通石灰ハ生石灰ヲ得ルコト能ハサル場合ニ限り代用トシ
 テ其ノ倍量ヲ用フヘシ
 七、「クロール」石灰水（二十倍） 「クロール」石灰五分
 水九十五分

用ニ臨ミテ新シキ「クロール」石灰五分ニ水九十五分ヲ徐ニ注キ振リテ混和スヘシ

「クロール」石灰ハ新ニ造リタルモノ又ハ密閉シテ貯ヘタルモノニシテ「クロール」様ノ特異ナル臭氣ヲ放チ之ニ醋ヲ加ヘルトキハ盛ニ「クロール」瓦斯ヲ生スルモノナルヲ要ス

「クロール」石灰水ノ應用及用量ハ石灰乳ニ同シ

八、「フォルムアルデヒド」

蒸汽又ハ水溶液トシテ使用ス

(イ)「フォルマリシン」蒸汽

「フォルマリシン」ヲ適當ナル装置ニ入レ水ト共ニ蒸發若ハ噴

霧セシム此ノ消毒ニ適スルモノハ密閉シ得ル室内又ハ室内ニ定著セル器物等ニシテ他ノ消毒方法ヲ行フコト能ハサルモノ及他ノ消毒ヲ行フコト能ハサル貴重品其ノ他ノ物件ニシテ其ノ内部ニ至ルマテ消毒方法ヲ施スノ必要ナシト認メタルモノトス

(ロ)「フォルマリシン」水「フォルマリシン」二分

「フォルマリシン」水ハ用ニ臨ミ「フォルマリシン」一分ニ定量ノ水ヲ加ヘ製スヘシ

「フォルマリシン」水ハ家屋什器及衣類等ノ消毒ニ適ス其ノ用法ハ石炭酸水ニ準スヘシ